伊奈町埋蔵文化財調査報告書　第１集

諏訪久保遺跡

埋蔵文化財調査報告

２０１１

伊奈町教育委員会

序

ここに伊奈町埋蔵文化財調査報告書第１集「諏訪久保遺跡」を刊行する運びとなりました。伊奈町の文化財保護や郷土の歴史を学ぶ観点から誠に喜ばしい限りです。

伊奈町は、大宮台地のほぼ中央に位置し、綾瀬川と原市沼川に挟まれています。河川近くは低地が広がり、小河川が樹枝状に谷を作るため、多種の環境をつくり上げております。このような多種の環境があり、豊富な水資源もあることから、70ヶ所の遺跡が確認されており、約２万５千年前の旧石器時代から現在まで脈々と人々の暮らしが営まれてきました。特に縄文時代前期の貝塚で県指定史跡の小貝戸貝塚や平安時代を中心とする大規模製鉄遺跡で県選定重要遺跡である大山遺跡、近世では町の名前の由来となった伊奈備前守忠次公が新田開発や河川改修などの事業を行う拠点とした県指定史跡の伊奈氏屋敷跡が著名です。

伊奈町では近年、土地区画整理事業などの影響もあり人口増加率・出生率が県内上位となっております。そのようななか保育所を誘致することとなり、建設場所が遺跡内と決まりました。そのため発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなり、平成22年度に本教育委員会が発掘調査を実施し、本報告書としてまとめました。

諏訪久保遺跡では、古墳時代中期の遺構・遺物を中心に縄文時代、奈良時代の遺構・遺物が発見されました。古墳時代中期の遺構は町域内で初めての発見となり、伊奈町の歴史に新たな１ページが書き加えられました。今後さらに調査を積み重ねることで当時の生活が明らかになっていくことが期待されます。これら埋蔵文化財を含む文化財の諸調査から歴史を明らかにしていくことは、郷土の歴史を知り、学ぶ上で大変意義深いことです。保存・活用などの活動で文化財を後世へ伝えていくことは、私たちの責務であると考えます。

最後になりましたが、貴重な埋蔵文化財の記録保存事業にご理解とご協力を賜り、現地での調査から本報告書刊行まで献身的にご協力いただいた社会福祉法人光彩会様、また土地所有者である柴崎篤房・とし子様、ご協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げ、本書の序とします。

平成23年３月

伊奈町教育員会
教育長　坂井貞雄

例　言

1．本調査報告書は埼玉県北足立郡伊奈町大字小室字諏訪久保9493番地他における埋蔵文化財調査報告書である。

2．この発掘調査は保育所及び特別養護老人ホーム建設に伴うものであり、発掘調査から調査報告書刊行までの一切の業務は、開発事業主である社会福祉法人光彩会から伊奈町教育委員会が委託を受けて実施し、すべての費用は社会福祉法人光彩会のご負担によるものである。

3．発掘調査及び整理作業は以下の日程で行った。

確認調査　　平成22年４月５日～８日、14日
発掘調査　　平成22年５月21日～８月10日
整理作業　　平成22年8月1日～2月8日

4．この発掘調査は伊奈町教育委員会が主体者となって行った。組織は以下のとおりである。

教育長
　坂井貞雄
教育次長
　清水弘
生涯学習課
　大塚勉、渋谷鉄二、小林薫子、藤原厚也、
　小坂真由美、岡野健二
調査担当者
　高塚卓史・小杉秀幸

5．本書における基準点測量及び平面図のトレースは、㈱オカマツエンヂニアリングに委託した。

6．写真撮影は小杉が行った。

7．出土品の整理・図版作成は小杉が行い、中丸裕美、植田雄己の協力を得た。

8．本書の執筆は小杉が行い、編集は高塚・小杉及び生涯学習課職員が行った。

9．出土遺物は伊奈町教育委員会が保管している。

10. 発掘調査の参加者は次のとおりである。（敬称略）

阿部克子、阿部鎌次、井黒京子、伊藤弘子、犬竹智裕、今里明子、内田五月、小野まさ、柿沼順子、金子喜美子、川嶋軍治、黒須武子、小荒井邦雄、兒井幸代、小林タツ、斉藤利夫、斉藤ゆり子、東海林正、白石誠一、鈴木くに子、須藤朱美、田井文子、高山佳一、立石勝男、田中きよ子、田中優起、田中義一、檀栄男、戸井田和夫、永倉三千代、満田覚、宮崎文昭、望月勝仁、山田常恵、吉川新一郎、世取山重之。秋元和彦、出野隆一、大塚健司、小川芳弘、加藤岳史、嘉無木栄、川田茂徳、清野茂勝、小島健司、小林仁、今一樹、近藤洋平、斎藤仲司、斎藤眞人、佐竹忠喜、澤邊和彦、渋谷晴子、鈴木栄美、瀬尾浩久、田口豊明、田口和、鳥海博、中村知義、野本初美、平松修、藤倉修一、松田正、柳澤智樹、山縣義徳、吉川誠一。

11. 整理作業の参加者は次のとおりである。（敬称略）

井黒京子、市川岳朗、伊藤弘子、犬竹智裕、今里明子、柿沼順子、金子喜美子、川嶋軍治、黒須武子、小荒井邦雄、小杉由希子、斉藤利夫、斉藤ゆり子、東海林正、白石誠一、田中きよ子、田中優起、満田覚、宮崎文昭、望月勝仁、山田常恵、吉川新一郎、吉田幸一、世取山重之。

12. 発掘調査、本書の作成にあたり、下記の機関・方々からご教示・ご協力を賜った。記して感謝いたします（順不同、敬称略）

埼玉県教育局生涯学習文化財課、㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団、蓮田市教育委員会、桶川市教育委員会、白岡町教育委員会、春日部市教育委員会、上尾市教育委員会、北本市教育委員会、さいたま市教育委員会、小野美代子、猛間孝志、細田勝、木戸春夫、赤熊浩一、西井幸雄、大谷徹、福田聖、栗岡潤、高久健二、田中和之、小宮雪晴、藤沼昌泰、小川貞、奥野麦生、松崎慶喜、中野達也、小宮山克巳、長谷尾篤、服部孝、斉藤成元、坂田敏行、青木文彦、大沢昌弘。

凡　例

1．遺跡全体におけるＸ・Ｙの数値は、世界測地系、国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36° 00′ 00″、東経139° 50′ 00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は全て座標北を示す。

Ｆ６グリッド北西杭の座標

Ｘ＝232.142m　　Ｙ＝－18746m

北緯36° 00′ 06″　東経139° 37′ 31″

2．調査区で使用したグリッドは、10m×10mのグリッドを設定した。

3．グリッドの名称は、北から南方向にアルファベット（Ａ・Ｂ・Ｃ･･･）、西から東方向に算用数字（1・2・3･･･）を付し、アルファベットと算用数字を組み合わせた。

4．本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下の通りである。

ＳＪ＝竪穴住居跡　　ＳＸ＝竪穴状遺構

ＳＫ＝土壙　　Ｐ＝ピット・柱穴

5．本書における挿図の縮尺は、以下の通りである。例外的なものについては、個別に示した。

遺構図

全体図 1／250

住居 1／60　　竪穴状遺構 1／60

土壙 1／60　　ピット 1／60

遺物実測図

土器実測図 1／4

土器拓影図・石匙・土錘 1／3

石鏃・土玉・石製模造品 1／2

6．遺物で断面を黒塗りしたものは須恵器を示す。（黒色処理30％）

7．遺構断面図に標記した水準数値は、海抜標高を表す。単位はmである。

8．本書に使用した地形図は、「埼玉県の地形」1／65,000（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、国土地理院発行 1／25,000（「久喜」・「鴻巣」・「岩槻」・「上尾」）、「伊奈町全図4」1／2,500（平成15年発行）を使用して、編集した。

目　次

序
例言
凡例
目次
Ⅰ　発掘調査の概要 ……1
　1．発掘調査に至る経過 ……1
　2．発掘調査・報告書作成の経過 ……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 ……2
　1．地理的環境 ……2
　2．歴史的環境 ……3
Ⅲ　遺跡の概要 ……6
Ⅳ　遺構と遺物 ……10
　1．縄文時代の遺構と遺物 ……10
　（1）住居跡 ……10
　（2）竪穴状遺構 ……12
　（3）土壙 ……14
　（4）ピット ……15
　（5）遺構外出土遺物 ……17
　2．古墳時代の遺構と遺物 ……22
　（1）住居跡 ……22
　（2）土壙 ……44
　（3）遺構外出土遺物 ……45
　3．奈良時代・平安時代の遺構と遺物 ……47
　（1）住居跡 ……47
　4．その他の時代の遺構と遺物 ……48
　（1）土壙 ……48
Ⅴ　調査のまとめ ……49
　1．調査の成果 ……49
　（1）古墳時代の集落の変遷について ……49
　（2）土錘・土玉について ……50
写真図版
抄録

挿　図　目　次

第1図　伊奈町の位置
第2図　埼玉県の地形
第3図　周辺の遺跡
第4図　基本土層
第5図　遺跡の範囲
第6図　調査区全体図
第7図　第11号住居跡出土遺物
第8図　第11号住居跡遺構図①
第9図　第11号住居跡遺構図②
第10図　第17号住居跡遺構図
第11図　第17号住居跡出土遺物
第12図　第1号竪穴状遺構遺構図
第13図　第1号竪穴状遺構出土遺物
第14図　第4号土壙遺構図
第15図　第4号土壙出土遺物
第16図　第11·24·25·46·53·56号土壙遺構図
第17図　第46·53号土壙出土遺物
第18図　G5グリッド Pit1 遺構図
第19図　G5グリッド Pit1 出土遺物
第20図　遺構外出土遺物①
第21図　遺構外出土遺物②
第22図　第1号住居跡出土遺物
第23図　第1号住居跡遺構図
第24図　第2号住居跡遺構図①
第25図　第2号住居跡遺構図②
第26図　第2号住居跡出土遺物
第27図　第3号住居跡遺構図①
第28図　第3号住居跡遺構図②

第29図　第３号住居跡出土遺物
第30図　第４号住居跡出土遺物
第31図　第４号住居跡遺構図
第32図　第５号住居跡遺構図
第33図　第５号住居跡出土遺物
第34図　第７号住居跡遺構図
第35図　第８号住居跡遺構図
第36図　第８号住居跡出土遺物
第37図　第９号住居跡遺構図
第38図　第10号住居跡遺構図①
第39図　第10号住居跡遺構図②
第40図　第10号住居跡出土遺物
第41図　第12号住居跡出土遺物
第42図　第12号住居跡遺構図①
第43図　第12号住居跡遺構図②
第44図　第13号住居跡遺構図
第45図　第13号住居跡出土遺物
第46図　第14号住居跡出土遺物
第47図　第14号住居跡遺構図
第48図　第15号住居跡出土遺物
第49図　第15号住居跡遺構図
第50図　第16号住居跡遺構図
第51図　第16号住居跡出土遺物
第52図　第19号土壙出土遺物
第53図　第19・28号土壙遺構図
第54図　第42・44号土壙遺構図
第55図　遺構外出土遺物①
第56図　遺構外出土遺物②
第57図　第６号住居跡・遺構外出土遺物
第58図　第６号住居跡遺構図
第59図　第27号土壙遺構図

表　目　次

第１表　周辺の遺跡
第２表　遺構外出土石器一覧表（縄文時代）
第３表　古墳時代住居跡出土石器一覧表
第４表　土錘・土玉計測表

写真図版目次

図版１　１　全景写真（南東から）
　　２　全景写真（北西から）
図版２　１　第１号住居跡　遺物出土状況
　　２　第１号住居跡　炉体土器
　　３　第１号住居跡　完掘状況
図版３　１　第２号住居跡　完掘状況
　　２　第３号住居跡　遺物出土状況
　　３　第３号住居跡　完掘状況
図版４　１　第４号住居跡　遺物出土状況
　　２　第４号住居跡　完掘状況
　　３　第５号住居跡　完掘状況
図版５　１　第６号住居跡　遺物出土状況
　　２　第６号住居跡　完掘状況
　　３　第７号住居跡　完掘状況
図版６　１　第８号住居跡　完掘状況
　　２　第９号住居跡　完掘状況
　　３　第10号住居跡　遺物出土状況
図版７　１　第10号住居跡　完掘状況
　　２　第11号住居跡　遺物出土状況
　　３　第11号住居跡　完掘状況
図版８　１　第12号住居跡　遺物出土状況
　　２　第12号住居跡　完掘状況
　　３　第13号住居跡　遺物出土状況
図版９　１　第13号住居跡　完掘状況
　　２　第14号住居跡　遺物出土状況
　　３　第14号住居跡　完掘状況

図版10　1　第15号住居跡 Pit1 遺物出土状況
2　第15号住居跡　完掘状況
3　第16号住居跡　遺物出土状況
図版11　1　第17号住居跡　完掘状況
2　第１号竪穴状遺構　完掘状況
3　第19号土壙　遺物出土状況
図版12　1　第19号土壙　完掘状況
2　第27号土壙　完掘状況
3　G5グリッド Pit1　遺物出土状況
図版13　1　第１号住居跡出土遺物①（第22図）
2　第１号住居跡出土遺物②（第22図）
3　第１号住居跡出土遺物③
4　第１号住居跡出土遺物④
5　第１号住居跡出土遺物⑤
6　第１号住居跡出土遺物⑥
図版14　1　第２号住居跡出土遺物①（第26図）
2　第２号住居跡出土遺物②（第26図）
3　第２号住居跡出土遺物③
4　第３号住居跡出土遺物①（第29図）
5　第３号住居跡出土遺物②（第29図）
6　第３号住居跡出土遺物③
図版15　1　第３号住居跡出土遺物④
2　第３号住居跡出土遺物⑤
3　第３号住居跡出土遺物⑥
4　第３号住居跡出土遺物⑦
5　第３号住居跡出土遺物⑧
6　第４号住居跡出土遺物①（第30図）
図版16　1　第４号住居跡出土遺物②（第30図）
2　第４号住居跡出土遺物③
3　第４号住居跡出土遺物④
4　第４号住居跡出土遺物⑤
5　第４号住居跡出土遺物⑥
6　第４号住居跡出土遺物⑦
図版17　1　第５号住居跡出土遺物①
2　第５号住居跡出土遺物②
3　第５号住居跡出土遺物③
4　第５号住居跡出土遺物④
5　第５号住居跡出土遺物⑤
6　第５号住居跡出土遺物⑥
図版18　1　第６号住居跡出土遺物①（第56図）
2　第６号住居跡出土遺物①炭化物付着状況写真
3　第６号住居跡出土遺物②（第56図）
4　第６号住居跡出土遺物③（第56図）
5　第６号住居跡出土遺物④（第56図）
6　第６号住居跡出土遺物⑤
図版19　1　第６号住居跡出土遺物⑥
2　第８号住居跡出土遺物（第36図）
3　第９号住居跡出土遺物
4　第10号住居跡出土遺物①（第40図）
5　第10号住居跡出土遺物②
6　第10号住居跡出土遺物③
図版20　1　第11号住居跡出土遺物（第7図）
2　第12号住居跡出土遺物①（第41図）
3　第12号住居跡出土遺物②（第41図）
4　第12号住居跡出土遺物③
5　第12号住居跡出土遺物④
6　第12号住居跡出土遺物⑤
図版21　1　第12号住居跡出土遺物⑥
2　第12号住居跡出土遺物⑦
3　第12号住居跡出土遺物⑧
4　第12号住居跡出土遺物⑨
5　第12号住居跡出土遺物⑩
6　第13号住居跡出土遺物①（第45図）
図版22　1　第13号住居跡出土遺物②（第45図）
2　第13号住居跡出土遺物②孔写真
3　第13号住居跡出土遺物③
4　第13号住居跡出土遺物③孔写真
5　第13号住居跡出土遺物④
6　第13号住居跡出土遺物⑤
図版23　1　第14号住居跡出土遺物①（第46図）
2　第14号住居跡出土遺物②（第46図）
3　第14号住居跡出土遺物③（第46図）
4　第14号住居跡出土遺物④

5　第14号住居跡出土遺物⑤
6　第14号住居跡出上遺物⑥
図版24　1　第14号住居跡出土遺物⑦
2　第14号住居跡出土遺物⑦アップ写真
3　第15号住居跡出上遺物①（第49図）
4　第15号住居跡出土遺物②（第49図）
5　第15号住居跡出土遺物③
6　第15号住居跡出上遺物④
図版25　1　第15号住居跡出上遺物⑤
2　第15号住居跡出土遺物⑥
3　第16号住居跡出土遺物①
4　第16号住居跡出上遺物②
5　第17号住居跡出土遺物（第11図）
6　第19号土壙出土遺物①（第53図）
図版26　1　第19号土壙出上遺物②
2　第19号土壙出土遺物③
3　第19号土壙出土遺物④
4　第19号土壙出土遺物⑤
5　第28号土壙出土遺物
6　G5グリッド Pit1 出土遺物
図版27　1　第11号住居跡出土大型甕口縁部のみ（第56図）
2　遺構外出土土器①（第20図）
3　遺構外出土土器②（第55図）
4　遺構外出上土器③（第57図）
5　石製模造品（表）（第41・55図）
（①第12号住居跡出土）
（②C4グリッド出上）
6　石製模造品（裏）
図版28　1　第12号住居跡出土　粘土塊
2　遺構外出土　土製品
3　遺構外出土　鉄滓①
4　遺構外出土　鉄滓②
5　第11・17号住居跡、第1号竪穴状遺構出上遺物
図版29　1　第4・46・53号土壙、遺構外出土遺物①（早期、前期、中期）
2　遺構外出土遺物②（後期①）
3　遺構外出上遺物③（後期②）
図版30　1　遺構外出土石器(縄文時代)①(第2表)
2　遺構外出土石器(縄文時代)②(第2表)
3　第1・2・3・5・10・14・15号住居跡出土石器（第3表）
図版31　1　土玉①（第22・26・29・30・33・40・45・46・48・51図）
2　土玉②（第41・55図）
3　第5・12号住居跡、遺構外出土土錘（第33・41・55図）
図版32　1　現場説明会の様子
2　展示会の様子

Ⅰ　発掘調査の概要

1．発掘調査に至る経緯

諏訪久保遺跡は、埼玉県遺跡地図には№18－036と登載されている。

分布調査の際に確認されて以来、調査等は行われてこなかった。

この度、保育所及び特別養護老人ホーム建設に先立ち試掘調査を行ったところ、縄文土器と土師器が大量に出土した。緊急性があることや建設地が広大なため代替地が得られず、やむを得ず発掘調査による記録保存を行うこととなった。

調査範囲については、試掘調査において遺物が確認された場所をもとに決定した。

文化財保護法第93条の２第１項の規定に基づき、工事主体者である社会福祉法人光彩会から平成22年５月26日付けで発掘届けが提出された。この届けに対して平成22年６月２日付け教生文第４－213号で発掘調査の実施が指示された。

発掘調査は、伊奈町教育委員会の直営で実施した。

2．発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

諏訪久保遺跡の発掘調査は、平成22年５月21日～８月10日に実施した。調査対象面積は7714㎡で、発掘調査面積は2,200㎡である。

平成22年４月中に事務手続き、５月下旬から事務所設置作業及び重機による表土除去作業を行い、人力による遺構確認作業後、順次土層断面図、平面図等の作成、写真撮影を行った。６月上旬に基準点測量を実施した。平成22年７月29日に遺構の分布状況を把握するため、発掘調査区の全景写真を撮影した。事務処理等を含め、すべての作業を平成22年8月25日に終了した。なお、７月22・23・26日に見学会を実施した。

調査の結果、縄文時代前期竪穴住居跡１軒、縄文時代中期竪穴住居跡１軒、竪穴状遺構１基、土壙11基、古墳時代中期竪穴住居跡14軒、土壙22基、奈良時代竪穴住居跡１軒、近世土壙19基を検出した。遺物は、縄文時代早期から後期の土器・石器、古墳時代中期の土師器・石器・土製品・石製品、奈良・平安時代の土師器・須恵器・鉄製品などがコンテナに26箱分出土した。特に、古墳時代中期の住居跡を14軒検出したことで、集落の様相の一端が明らかとなった。遺物も豊富で、土師器の各器種・土錘・土玉・石製模造品が出土している。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は、発掘調査の終盤の８月当初から、遺物の水洗・注記作業を始め、続いて遺物の接合・復元作業を行った。同時に遺構図面の修正・第二原図・全体図の作成を行った。

遺物の復元作業と並行して10月中旬より遺物の実測・拓本・トレース作業を実施し、２月初旬まで実施した。遺構・遺物の整理作業が終了し次第、順次版組・刷付作業を実施し、同時に原稿執筆を行った。遺物整理の終了した12月中旬より遺物写真撮影、遺物写真図版の編集作業を行った。作業が終了した段階で、遺構図面類・出土遺物を分類・整理し、収納作業を行った。なお、11月６・７日に開催された伊奈町総合文化祭のなかで「諏訪久保遺跡出土品展」を行った。

12月中旬に、印刷会社を決定し、入稿した。３回の校正を経て、３月下旬に報告書を刊行した。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

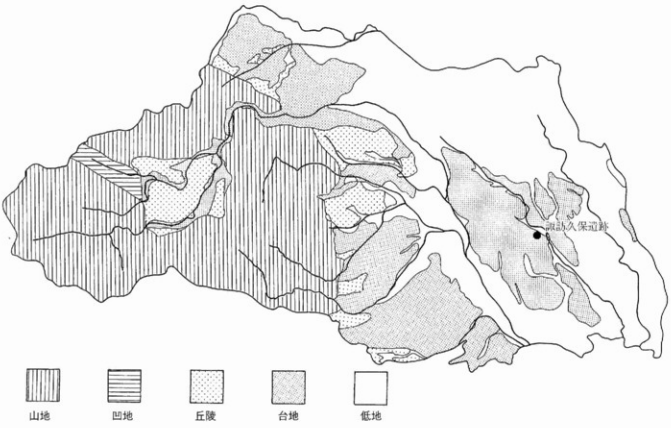
1．地理的環境

諏訪久保遺跡の所在する伊奈町は、埼玉県東部平地のほぼ中央に位置している。町の大部分は大宮台地上にあり、東側に綾瀬川、西側に原市沼川が流れ、沖積低地を形成している。

首都中心部から約40kmの位置にあり、町境は上尾市、桶川市、蓮田市に接している。町内には国道および主要鉄道の駅はないが、上越・東北新幹線の軌道を利用した埼玉新都市交通（ニューシャトル）の駅が5駅設置されている。主要地方道の整備や区画整理事業などによる宅地化が進み、人口が増加している。それに伴い、緑地や農耕地が急激に減ってきている。

町内における最高点は北西端で標高20m、南東にゆくほど低く、最も低い場所で標高8.4mを測る。台地の南部では標高10mの等高線が台地の縁となっている。

第1図　伊奈町の位置



第2図　埼玉県の地形（1／650000）

2．歴史的環境

諏訪久保遺跡（1）の周辺には、多くの遺跡が存在する。近年では、上越・東北新幹線の建設、上尾都市計画事業伊奈特定土地区整理事業によって多くの遺跡が発掘された。これらの発掘以前から学史上著名な遺跡も多く調査されている。

綾瀬川流域は、縄文時代前期の貝塚が集中する地域であり、蓮田市黒浜貝塚（19、国指定史跡）、関山貝塚（17）、伊奈町小貝戸貝塚（11、県指定史跡）、大針貝塚（9）が著名である。

伊奈町域においては、旧石器時代の遺物が出土している主な遺跡として、向原遺跡（2）で剥片などの石器集中が見つかっているほか、北遺跡(10)で尖頭器など、原遺跡（8）で細石器・細石核など、久保山遺跡（13）でナイフ形石器などが出土している。

続く縄文時代では草創期の遺物は見つかっていないものの、早期には戸崎前遺跡（4）で炉穴2基が検出されており、撚糸文土器・条痕文土器を中心とする土器群が出土している。前期・中期のような集中的な土地利用は認められない。前期になると戸崎前遺跡と谷畑遺跡（7）で住居跡が検出されている。小貝戸貝塚・大針貝塚では、貝塚が残されている。大針貝塚では学術発掘が行われており、2軒の住居跡と地点貝塚が発見されている。これらの貝塚は、白岡町や蓮田市の綾瀬川流域の遺跡と密接な関係が考えられる。中期の遺跡としては北遺跡・原遺跡が注目に値する。北遺跡では72軒、原遺跡では100軒前後の住居跡が検出されている。両遺跡とも未発掘部分があるため今後も住居跡数が増加するものと思われる。他にも中期の集落と考えられる遺跡が多くある。後期になると遺跡の数は激減し、戸崎前遺跡で住居跡が見つかっている他は土器片が出土しているのみである。さらに晩期になると住居跡も見つかっておらず、遺構としては、大山遺跡（15）で埋甕が見つかっているだけである。遺物としては、伊奈氏屋敷跡（16）でまとまった土器群が出土している。また、表彩資料ではあるが、氷川神社裏遺跡(12)の遺物が発表されている（細田1980)。同遺跡では現在まで発掘はされていないが、遺構・遺物が発見される可能性が高い。後期・晩期の遺跡は斜面や低地部に存在する場合が多く、発見するのが難しい。今後の調査により遺跡の数が増える可能性もある。

弥生時代の遺跡は、分布調査で土器片が採集されたことはあるが、遺構は見つかっていない。

古墳時代になると再び遺跡の数が増え、薬師堂根遺跡（3）、戸崎前遺跡、向原遺跡、大山遺跡、小室天神前遺跡（14）で遺構が確認されている。薬師堂根遺跡では、前期の住居跡が8軒検出されている。戸崎前遺跡では前期の住居跡が45軒、方形周溝墓が1基検出されている。向原遺跡では、前期の住居跡20軒、方形周溝墓が1基が検出されている。大山遺跡では、前期の住居跡が23軒、後期の住居跡が9軒検出されている。町内では中期の遺構は見つかっていなかったが、同じ綾瀬川流域の蓮田市域では、荒川附遺跡（18）で12軒の住居跡が検出されている。

奈良時代の遺跡は戸崎前遺跡で8世紀中葉以降の住居跡が4軒検出され、大山遺跡でも7軒の住居跡が検出されている。

平安時代になると、向原遺跡で4軒、薬師堂根遺跡で1軒、戸崎前遺跡で6軒、大山遺跡で23軒の住居跡が検出されている。大山遺跡では、20基の製鉄炉が検出されており、大規模製鉄遺跡であることが知られている。また、周辺の6遺跡で18基の炭焼窯が検出されており、上尾市域でも多くの炭焼窯が検出されている。大山遺跡との関連が伺える。

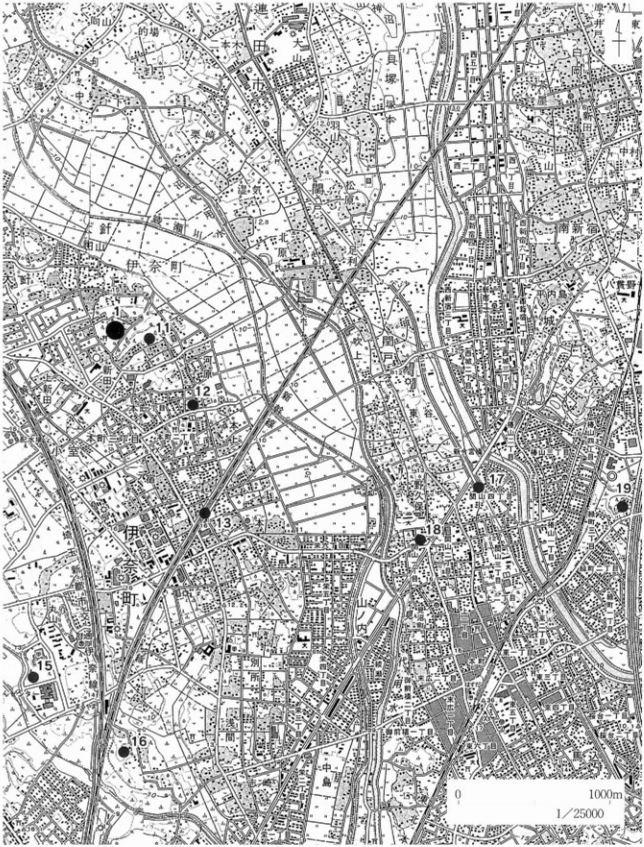
ている。相野谷遺跡（5）では、多数の柱穴群とともに中世瓦が出土している。戸崎前遺跡では土橋を伴う一辺70mの堀跡が検出されており、出土遺物により、13世紀末から14世紀中頃と推定される。八幡谷遺跡（6）、薬師堂根遺跡では、方形の溝で囲まれた建物跡、墓壙、土壙が検出されている。また、伊奈氏屋敷跡で「障子堀」が検出されている。中世の遺物は出土していないが、「障子堀」は中世の遺構と考えられているため、伊奈氏屋敷跡の利用は中世には始まっていたようである。

近世になると、徳川家康の江戸城入府に伴い、伊奈備前守忠次が関東郡代となり、この地に陣屋を築いた。現在はこの陣屋が県指定史跡となっており、良好な堀や土塁などの遺構が残っている。

第1表　周辺の遺跡

番号	遺跡名
1	諏訪久保遺跡
2	向原遺跡
3	薬師堂根遺跡
4	戸崎前遺跡
5	相野谷遺跡
6	八幡谷遺跡
7	谷畑遺跡
8	原遺跡
9	大針遺跡
10	北遺跡
11	小貝戸貝塚
12	氷川神社奥遺跡
13	久保山遺跡
14	小室天神前遺跡
15	大山遺跡
16	伊奈氏屋敷跡
17	関山貝塚
18	兜川附遺跡
19	黒浜貝塚

第3図　周辺の遺跡


1
11
12
13
15
16
17
18
19
伊奈町
0
1000m
1／25000

Ⅲ　遺跡の概要

諏訪久保遺跡は、北足立郡伊奈町大字小室字諏訪久保に所在し、伊奈町役場から北東へ約200ｍに位置している。

遺跡は、大宮台地のほぼ中央に位置している。東側から入り込んだ谷が南北に分かれ囲むようになった舌状台地上に立地しており、標高は約17ｍで台地下とは４ｍの比高差がある。遺跡の南北にあるどちらの谷奥にもかつては湧水点があった。遺跡から北東約１kmに綾瀬川が流れている。綾瀬川へ向かう遺跡から300ｍほど東へ行ったところからは低地になっている。

調査区は概ね平坦であるが、北東側から南側にかけては谷部に向かって傾斜している。

発掘調査前は、雑木林だったため根や倒木痕が多く、表土剥ぎや遺構確認に非常に多くの時間を要した。

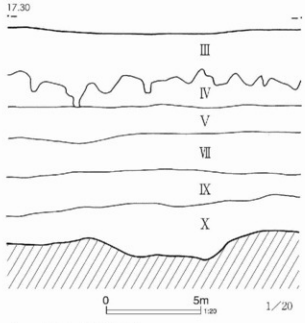
検出された遺構は、縄文時代の遺構として前期後葉の竪穴住居跡１軒、中期の住居跡１軒と竪穴状遺構１基、土壙11基、古墳時代中期の住居跡14軒、土壙22基、奈良時代の住居跡１軒、近世の土壙が19基である。遺跡の主体となる時期は古墳時代中期であるが、縄文時代の遺構・遺物も多く発見されている。遺構・遺物の分布を見ると台地の中央部にある平坦部を中心に古墳時代中期の住居跡が展開し、縄文時代の遺構・遺物は縁辺部に位置している。

古墳時代中期の遺構は、伊奈町では初めての発見となる。いままでは、薬師堂根遺跡、戸崎前遺跡、向原遺跡、大山遺跡で古墳時代前期・後期の遺構が検出されてきたが、中期の遺構は発見されておらず、該期の様相は明らかとなっていなかった。

今回の発掘調査で中期の住居跡が14軒検出したことにより、集落の様相や当時の大宮台地上にある伊奈町の様相を知る大きな手がかりとなる。住居跡の分布は、調査区の西側にも続いており、比較的大きな集落となることが予想される。

縄文時代前期後葉の遺構も伊奈町では初めての発見となる。谷を挟んだ南側には県指定の小貝戸貝塚がある。今回検出した住居跡とは時期は異なるが、海退に伴う縄文時代前期の人々の生活の移り変わりを知ることができる。

奈良時代の住居跡からは竪壁の一部や鉄滓が出土している。そのため大規模な製鉄遺跡である大山遺跡との関連が考えられる。

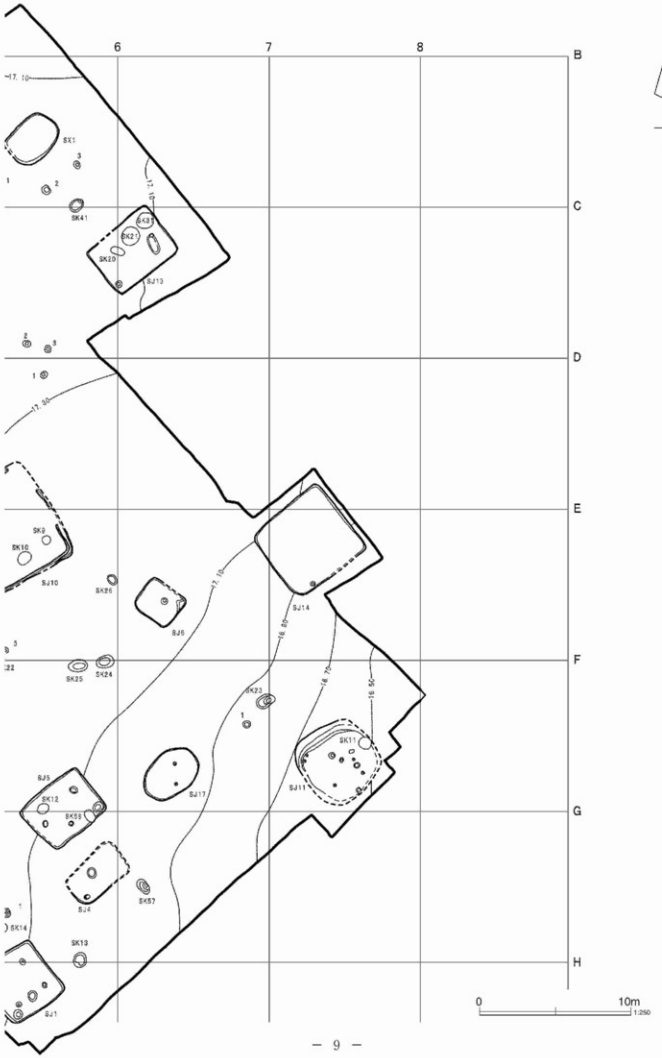


第４図　基本土層

第５図　遺跡の範囲

1
2
3
4
5
17, 10
17, 30
17, 10
SK42
SK43
SK44
SK45
SK54
SK27
SK17
SJ12
SK51
SK38
SK4
SJ8
SK33
SK26
SK7
SK39
SK3
SK2
SK6
SK8
SK50
SK40
SK49
SK46
SK47
SK10
SK59
SK33
SJ7
SJ16
SK36
SJ9
SK52
SK22
SJ15
SK18
SK16
SK30
SJ2
SJ3
SK56
SK19
SK14

第６図　調査区全体図


6
7
8
B
C
D
E
F
G
H
SK1
SK41
SK21
SK20
SJ13
SK9
SK10
SJ10
SK26
SJ6
SJ14
SK25
SK24
SK23
SK11
SJ11
SJ5
SK12
SK58
SJ17
SJ4
SK57
SK14
SK13
SJ1
0
10m
1:250

Ⅳ　遺構と遺物

1．縄文時代の遺構と遺物

（1）住居跡

第11号住居跡（第8・9図、図版7・27）

第11号住居跡は、調査区南東端のF－7グリッドに位置し、南東に向かって傾斜が始まる場所に構築されている。北西側の壁面以外は明確でないが、柱穴等の位置から壁面を想定した。

平面形態は、隅丸方形に近い形を呈すると思われる。規模は、長軸5.13m、短軸5.06m、深さ0.57mを測る。柱穴は8本検出した。P1・5が主柱穴と考えられる。

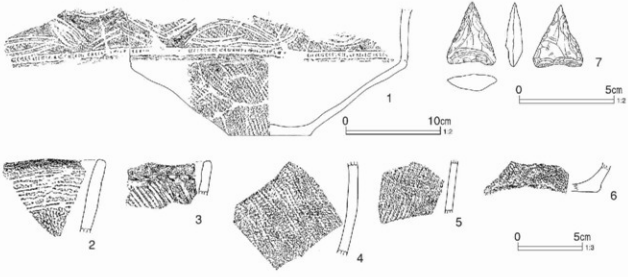
住居跡中央やや北寄りに炉跡を検出した。平面形は楕円形で、底に被熱による硬化は見られなかったが、覆土中から焼土を検出した。

上層からは古墳時代中期の大型の甕が出土しているが、本住居跡の所属時期は、出土土器から諸磯式期と考えられる。

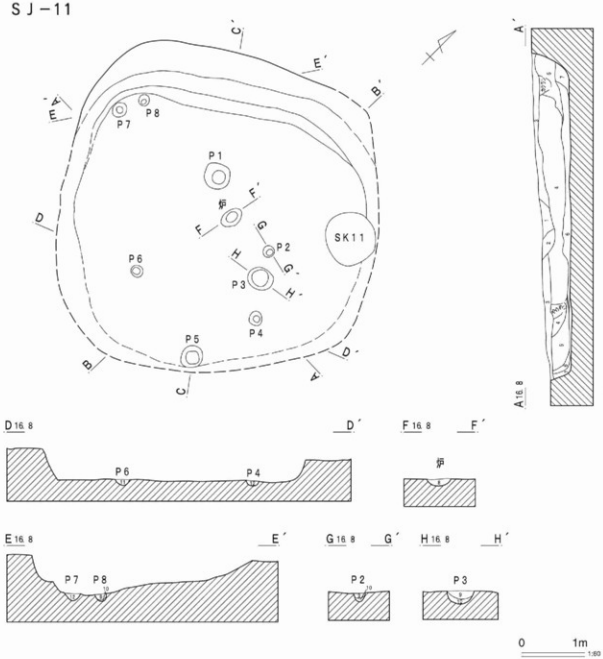
第11号住居跡出土遺物（第7図、図版20）

土器片・石器が出土した。図示した遺物は、土器6点、石器1点である。

1は、一括出土した土器で、P1の上及び覆土中から出土した。浅鉢形土器で、底部と胴部を復元することができた。残存高15.2cmで、口縁が残っていないため口径は不明、胴部残存最大径30.5cm、底径8.7cmである。文様構成は、直立している胴部上半と底部へすぼまっていく胴部下半で分かれる。胴部上半は、横位と斜位の木の葉状文を連結して一単位とし、その間を2条の沈線を斜位に施文し、モチーフを描く。木の葉状文とモチーフを描く位置には施文前に原体RLの縄文が施文してある。胴部下半は、目の細かい原体RLの縄文が底部近くまで施文されている。2は、縄文の地文に半裁竹管工具による平行沈線・波状沈線が繰り返し交互に施文されている。3は、4～5本の沈線文が櫛歯状工具で斜位に施文されている。胎土には繊維が入っている。4は、原体LRの縄文が施文されている。5は、胴部最下部で、原体LRの縄文が施文されている。6は、底部破片で、胴部最下部まで原体LRの縄文が施文されている。2～6は諸磯a式土器の新段階である。7は、石鏃で長軸3.0cm、短軸2.6cm、厚さ0.9cm、

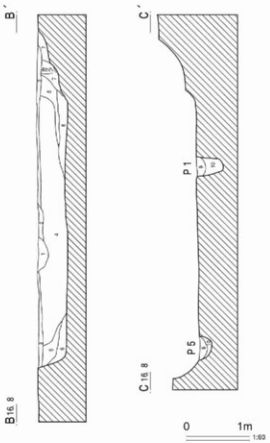


第7図　第11号住居跡出土遺物



1暗褐色土　ロームブロック（0.5cm）強微量、ローム粒子少量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む、やわらかい。
2黒褐色土　ロームブロック（0.5cm）極微量、ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化物粒子微量含む、やややわらかい。
3褐色土　ロームブロック（0.5～1cm）微量、ローム粒子微量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む。
4暗褐色土　ロームブロック（0.3～0.5cm）微量、ローム粒子多量、焼土粒子多量、炭化物ブロック（1cm）極微量、炭化物粒子極微量含む、ややしまっている。
5褐色土　ロームブロック（0.5cm～2cm）極量、ローム粒子多量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む。
6褐色土　ロームブロック（0.5cm～2cm）非常に多量含む、しまっている。
7褐色土　ロームブロック（1cm）非常に多量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量、白色土粒子極微量含む、しまっている。
8褐色土　ロームブロック（1cm）多量、ローム粒子微量、焼土ブロック（1cm）極微量、焼土粒子少量、炭化物粒子極微量含む、ややしまっている。
9暗褐色土　ロームブロック（1～2cm）微量、ローム粒子極量、焼土ブロック（0.5cm）極微量、焼土粒子微量、炭化物粒子極微量含む、しまっている。
10暗褐色土　ロームブロック（1cm）微量、ローム粒子極微量、焼土粒子極量含む、締まりしまっている。
11褐色土　ロームブロック（0.5～1cm）微量、ローム粒子微量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む、しまっている。
12黒褐色土　ロームブロック（1cm）微量、ローム粒子少量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む、しまっている。

第８図　第11号住居跡遺構図①



第９図　第11号住居跡遺構図②

第17号住居跡（第10図、図版11）

第17号住居跡は、調査区南東端に近いＦ－６グリッドに位置している。第11号住居跡同様、南東に向かって傾斜が始まる位置に構築されている。住居跡の覆土は薄かった。周辺グリッドからは、第17号住居跡出土土器と同時期の土器片が大量に出土している。

平面形態は、楕円形を呈している。規模は、長軸4.02m、短軸2.83m、深さ0.19mを測る。小さく浅い柱穴を２本検出した。

本住居跡の所属時期は、出土遺物から阿玉台式期と考えられる。

第17号住居跡出土遺物（第11図、図版29）

阿玉台Ⅱ式でも古い段階の土器と考えられる。１は、ミニチュア土器の完形で、口径3.6㎝、器高1.7㎝で無文である。内外共に工具を使って調整されている。２は、隆帯文で楕円形区画を作り、中に蛇行単列角押文が施されている。区画の下には、弧状の角押文が施されている。３は、横方向に山形文が施文されている。４は、口縁部の破片で、爪形状の刻みが入った隆帯文が横位に施される。下部にも刻みのある隆帯文が施されている。５は、爪形文が横位に施されている。６は、口縁部に刻みが入っており、３～４段の円形竹管文列、単列角押文が横位に施されている。７は、口縁部下に２条の単列角押文が横位に施されている。その下に多条の単列角押文が縦位に施されている。８は、４条の有節線文が弧状に施され、その下に山形文が横位に施文されている。２・３・６・７の胎土には雲母が含まれている。９は、口縁波頂部把手である。内側上部に三叉状の凹みがあり、把手頂部には刺突文が施文されている。貼付されている突起の上部は渦巻き状になっている。刻みのある隆帯文の両側にはペン先状工具による三角文が施文されている。その下部には円形隆帯が横向きに貼付され、刺突文が施されている。

（２）竪穴状遺構

第１号竪穴状遺構（第12図、図版11）

第１号竪穴状遺構は、調査区北端のＢ－５グリッドに位置している。住居跡の南側と東側は傾斜が始まる。

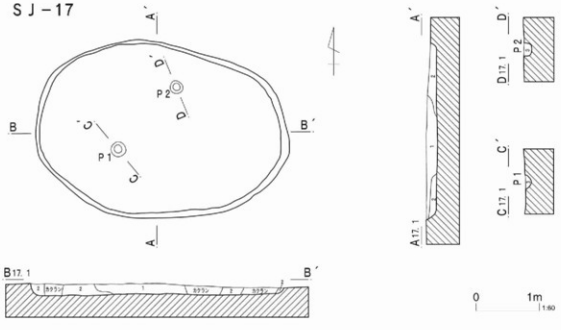
平面形態は隅丸方形に近い形を呈している。規模は、長軸3.56m、短軸2.62m、深さ0.52mを測る。柱穴などの付属施設跡は検出できなかった。

第１号竪穴状遺構の所属時期は、出土遺物から阿玉台式期と考えられる。

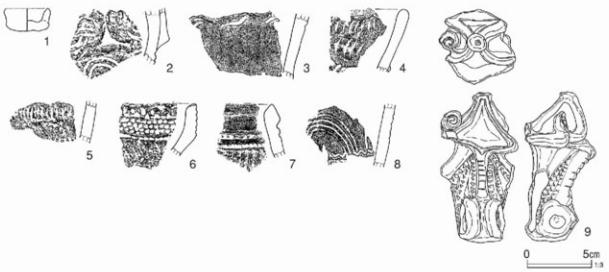
第１号竪穴状遺構出土遺物（第13図、図版29）

１は、横方向に沈線文と山形文が繰り返し交互に施文されている。２は、口縁波頂部で、浅い沈線が口縁に沿って施文され、細い列点文が２～３条垂下している。３は、胴部破片で、２条の隆帯文が横位に施され、その直下に波状並行沈線文が施されている。上下に複列角押文が施されている。４は、胴部破片で、刻みをもつ隆帯文が横位に施

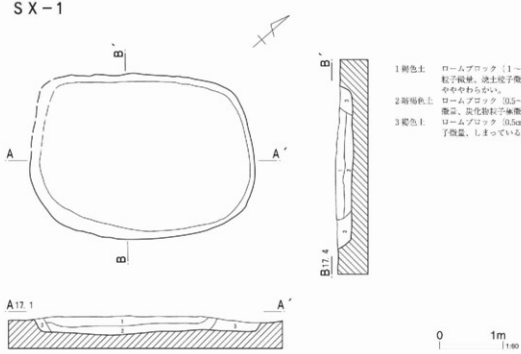
され、上側には複列角押文、下部には２条の平行山形文が施されている。５は、口縁部破片で、口唇部に単列角押文が施され、口縁部には隆帯文が施文されている。１、３、５は、胎土に雲母が多く含まれている。６は、横位の隆帯文と、それに連結する隆帯文が施文されている。どちらの隆帯文の下にも２条または４条の複列角押文が施文されている。７は、波状口縁で、隆帯が口縁部から垂下している。それに沿い、横位に施文された２条の沈線が弧状になる。８は、２条の隆帯文があり、上の隆帯文は交互刺突文と爪形文が施されている。下部は、縄文が施されている。



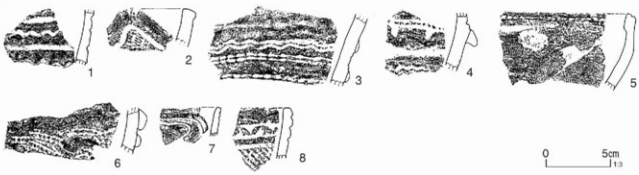
第10図　第17号住居跡遺構図



第11図　第17号住居跡出土遺物



第12図　第１号竪穴状遺構遺構図



第13図　第１号竪穴状遺構出土遺物

（３）土壙

第４号土壙（第14図）

第４号土壙は、調査区中央やや北西のＤ－３グリッドに位置している。平面形態は円形を呈している。規模は長軸0.96m、短軸0.95m、深さ0.54mである。

遺物は、縄文土器が２点出土している。時期は、称名寺式から堀之内式の土器と考えられる。

第４号土壙出土遺物（第15図　図版29）

１は、地文に原体ＲＬの縄文が施されている。２は、沈線文が垂下し、下部で左にカーブしている。途中からは沿うように別の沈線文が施文されている。

第11号土壙（第16図）

第11号土壙は、Ｆ－７グリッドに位置し、第11号住居跡と重複している。覆土の状況から第11号住居跡より新しいと考えられる。平面形態は、円形に近い形を呈している。規模は長軸0.82m、短軸0.76m、深さ0.34mである。

第24号土壙（第16図）

第24号土壙は、Ｅ・Ｆ－５グリッドに位置し、第25号土壙のすぐ東側に位置している。平面形態は楕円形を呈している。規模は長軸1.12m、短軸0.78m、深さ0.25mである。

遺物は、土器が１点出土しているが、小破片のため時期判定はできなかった。焼土を多く検出したことから炉跡の可能性も考えられる。所属時期は、縄文時代と考えられる。

第25号土壙（第16図）

第25号土壙は、Ｆ－５グリッドに位置しており、第24号土壙のすぐ西側に位置している。平面形態は楕円形を呈している。規模は長軸1.25m、短軸0.79m、深さ0.20mである。

遺物は出土していないが、第24号土壙と形態・覆土が類似していることから、炉跡の可能性も考えられ、縄文時代に所属すると思われる。

第46号土壙（第16図）

第46号土壙は、Ｅ－３グリッドに位置している。平面形態はほぼ円形に近い形を呈している。規模は長軸1.27m、短軸1.14m、深さ0.40mである。

遺物は、縄文土器が４点と石匙が１点出土している。

第46号土壙出土遺物（第17図１、図版29）

１は、完形の石匙で長軸8.5cm、短軸7.4cm、厚さ0.7cm、重さ70.1gである。

第53号土壙（第16図）

第53号土壙は、調査区北端のＤ・Ｅ－４グリッドに位置し、第10号住居跡の西側、第16号住居跡の北側で検出した。平面形態は楕円形を呈している。規模は長軸2.13m、短軸1.27m、深さ0.19mである。諸磯ａ式の土器が出土しているので、この時期に属する土壙と考えられる。

第53号土壙出土遺物（第17図２～４、図版29）

２は、横位の楕円の刻みが入った２条の沈線、横位の爪形文が施されている。その下には肋骨文が施されている。３は、原体ＲＬの縄文が施されている。４は、木の葉状文が描かれている。

第56号土壙（第16図）

第56号土壙は、調査区南西のＧ－４・５グリッドに位置している第３号住居跡内から検出した。平面形態は円形を呈している。規模は長軸0.80m、短軸0.56m、深さ1.27mである。土器小破片が数点出土している。形態・覆土から縄文時代後期の土壙と判断した。

（４）ピット

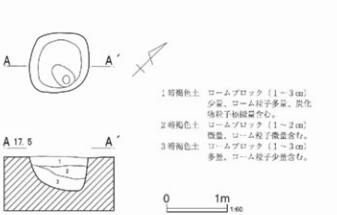
北側で多く検出した。グリッドごとに通し番号を付した。遺物は、ほとんど見られず、掘立柱建物跡となる柱穴も確認できなかった。

Ｇ－５グリッド第１号ピット（第18図　図版12）

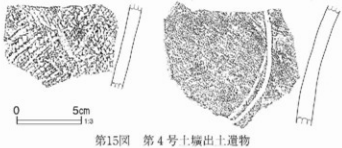
上部より多数の縄文土器片が出土した。平面形態は、楕円形を呈している。規模は、長軸0.66m、短軸0.55m、深さ1.18mである。所属時期は縄文時代後期称名寺式期と考えられる。

Ｇ－5グリッド第１号ピット出土遺物（第19図、図版26）

一括で出土した土器で、M字モチーフに変化しているＪ字文が描かれ、列点が充填される。称名寺式３段階と考えられる。推定器高80.0cm、推定口径59.0cmである。同一個体かどうかは不明であるが、底径10.0cmの底部破片も出土している。

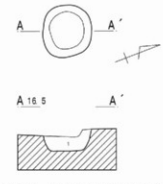


第14図　第４号土壙遺構図



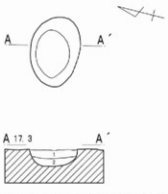
第15図　第４号土壙出土遺物

SK－11



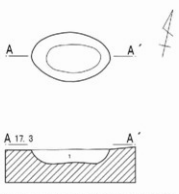
1 暗褐色土　ローム ブロック（1～2cm）微量、ローム粒子少量、焼土粒子極微量、炭化物粒子微量含む、しまっている。

SK－24



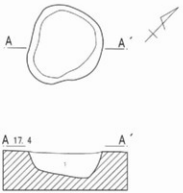
1 赤褐色土　ローム ブロック（1cm。被熱している）極微量、焼土ブロック（0.3～2cm）少量、焼土粒子多量、炭化物粒子少量含む、しまっている。
2 褐色土　ローム ブロック（2cm）微量、ローム粒子極微量、焼土粒子微量、炭化物粒子極微量、やや しまっている。

SK－25



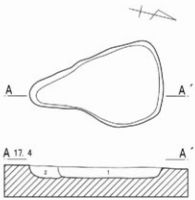
1 暗褐色土　ローム ブロック（0.5～1cm）極微量、焼土ブロック（0.3～0.5cm）少量、焼土粒子微量含む、しまっている。

SK－46



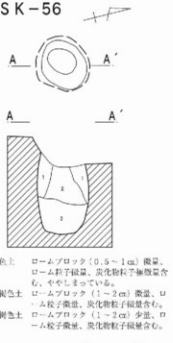
1 黒褐色土　ローム ブロック（0.3～20cm）多量、ローム粒子多量含む、やや しまっている。

SK－53



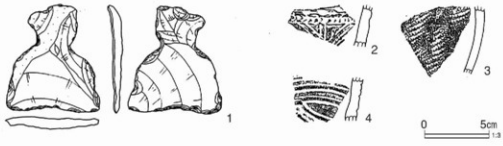
1 暗褐色土　ローム ブロック（0.5～2cm）少量、ローム粒子少量、炭化物粒子極微量含む、しまっている。
2 極暗褐色土　ローム ブロック（2～3cm）極微量、ローム粒子極微量、炭化物粒子極微量含む、しまっている。

SK－56

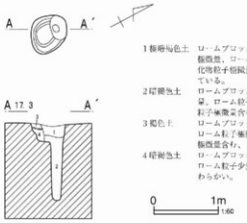


1 褐色土　ローム ブロック（0.5～1cm）微量、ローム粒子微量、炭化物粒子極微量含む、やや しまっている。
2 暗褐色土　ローム ブロック（1～2cm）微量、ローム粒子微量、炭化物粒子極微量含む。
3 暗褐色土　ローム ブロック（1～2cm）少量、ローム粒子微量、炭化物粒子微量含む。

第16図　第11・24・25・46・53・56号土壙遺構図



第17図　第46・53号土壙出土遺物



第18図　Ｇ５グリッドPit1遺構図

（５）遺構外出土遺物

（ａ）土器（第20・21図、図版29）

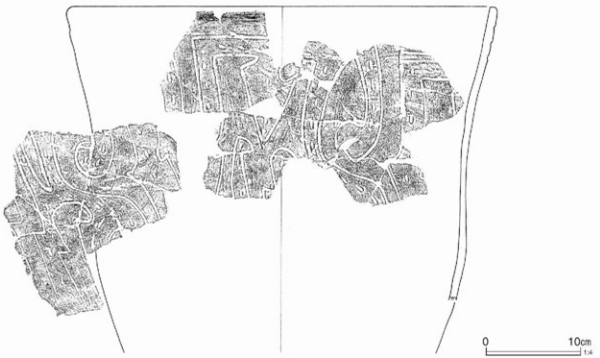
後期堀之内式を主体として、早期から後期までの土器を含む。

第Ⅰ群土器（第20図１～６、図版29）

早期・前期の土器群を一括する。

１は、早期条痕文系土器で茅山式土器と考えられる。胴部の破片で、条痕文が内外面ともに施文されている。

２～６は、前期の土器である。２は、黒浜式～諸磯ａ式に属する土器と考えられる。胴下部から



第19図Ｇ５グリッドPit1出土遺物

底部にかけての破片である。原体ＬＲの縄文が施されている。３～５は、諸磯a式～諸磯b式に属する土器と考えられる。３は、口縁部の破片で、口縁に沿って櫛歯状工具による３～４本の集合沈線が施文されている。縄文を地文に山形文及び円形竹管文が施されている。４は、上部に横方向の連続爪形文列を施し、下部に縦方向の連続爪形文が施されている。５は、口縁部破片で横方向の連続爪形文が２条施され、その間に横方向の刻みが斜位に入っている。６は、諸磯ｂ式土器である。刻み目のある浮線文が施文されている。

第Ⅱ群土器

中期前半の土器群を一括する。

第１類土器（第20図７・８、図版29）

阿玉台Ⅰｂ式の土器群を一括する。

７は、口縁部下に弧状の有節線文が施されてい

る。内側の稜線が明確である。8は、口縁部に刻みがあり、口縁下には単列角押文が施されている。刻みを施された2本の隆帯文が横方向に貼付されている。上の隆帯文は波状で、上下に単列の角押文が施されている。下の隆帯と接着する部分がある。7・8は、胎土に雲母を含む。

第2類土器（第20図9～16、図版29）

阿玉台Ⅱ式の土器群を一括する。

9は、口縁下部に単列角押文が1条横位に施され、その下に単列角押文により長方形区画が描かれる。さらにその下にも単列角押文による横位の施文がある。断面三角状隆帯文が横位に施され、楕円形の区画が作られている。10は、口縁部の破片だが、口唇部が剥離している。角形列点文が横位にあり、円形隆帯文、楕円形隆帯文、断面三角状隆帯文が施文されており、楕円形隆帯文には、複列角押文が施文されている。断面三角状隆帯文の下部には、弧状の複列角押文が施文されている。11は、2条のペン先状工具による三角文が施され、隆帯文と連続爪形文が施文されている。12は、波状口縁の頂部で、口縁部端と中央の隆帯に刻みが入っている。13は、口縁部の破片で斜め上方向に突出している。右側にも突出部があったと思われる。口唇部には2条の単列角押文が施文されている。刻みの入った隆帯文が施文されている。隆帯文に沿い2条の連続刺突が施文されている。14は、波状口縁の頂部で口縁部に沿って複列角押文が施文されている。中央縦方向に刻みの入った大きな断面三角状隆帯文があり、左側面上半に有節線文が施されている。左側には2条の波状複列角押文が横位に施文されている。右側には、複列角押文が斜方向と横方向に施文されている。下部には横位の隆帯文が施されている。15は、断面三角状隆帯文により三角状に区画されており、連続爪形文が隆帯に沿って施文されている。区画中央には、沈線が施文されている。16は、波状口縁の波頂部で、中央には孔がある。口縁部には刻みが入っており、口縁部に沿って複列角押文が施文されている。孔の下部は断面三角状隆帯で区画されており、複列角押文が施文されている。9・10、12～14、16の胎土には雲母が含まれている。

第3類土器（第20図17～21、図版29）

藤内式から井戸尻式の土器群を一括する。

17は、隆帯文が横位に施文され、その上下にキャタピラ文が施文されている。その下部に山形文が3条以上横方向に施文されている。蛇行沈線文が垂下している。胎土に雲母が含まれている。18は、口縁から突出した部分から隆帯文が垂下し、半裁竹管工具による平行沈線文により区画が作られ、左側の区画は斜位の沈線が充填され、右側の区画は縦位の沈線が充填されている。19は、波頂部に向かう口縁部の破片である。口唇は貼り付けられており、前面に刻みが入っている。口縁部に沿って1条の沈線が施され、その下には半裁竹管工具により四角い区画が作られている。区画のなかは、平行沈線に沿ってキャタピラ文が巡っており、その内側に爪形文、内部に縦方向の蛇行沈線文が1条施文されている。20は、浅鉢で、口縁部に沿って沈線文が施文されている。沈線文で区画が作られている。21は、沈線で区画されたなかに平行沈線文と爪形文が施文されている。

第4類土器（第20図22、図版29）

加曽利EⅢ式の土器群を一括する。

22は、波状口縁で、S字の隆帯文が横位に施され、区画を作っている。区画のなかは原体RLの縄文が施されている。

第Ⅲ群土器

後期前半の土器群を一括する。

第1類土器（第20図23～27、図版29）

称名寺式の土器群を一括する。

23は、地文の縄文（撚糸文）が口縁部まで施され、沈線文による区画の内部は縄文が充填されている。2段階と考えられる。24～27は、沈線による区画内が列点文で充填されている。3段階と考

えられる。

第２類土器（第20図28～30、第21図１～10、図版29）

堀之内Ⅰ式の土器群を一括する。

28は、口縁部の把手で、内側は斜め上を向いており、称名寺式的なＣ字を合わせたようなモチーフがある。外側は、突起の両側面からの刺突文がある。29・30・第21図１～７は口縁部破片で、29・30、第21図１・４は、波頂部破片である。29は、波頂部に隆帯文が貼付され、沈線文、刺突文が施されている。隆帯文を起点に沈線文が引かれ、沈線上に刺突文が施されている。地文に原体ＲＬの縄文が施文されている。30は、波頂部に刺突文が２つ縦に並んで施され、その刺突文を起点に沈線が引かれている。第21図１は、隆帯文が垂下し、波頂部に刺突文があり、逆Ｃ字状の沈線文、口縁に沿う沈線文が施されている。地文に縄文が施され、沈線が縦方向と斜方向に引かれている。２は、口縁下に沈線文が横位に引かれ、地文に原体ＬＲの縄文を施し、上部に２条の弧線文、下部にも沈線文が施されている。１条の弧線文が下部に施されている。３は、口縁下に沈線文が引かれ、上端に刺突文がある刻みを施された隆帯文が口縁部から垂下している。地文に原体ＲＬの縄文が施されている。４は、波頂部に刺突文が施されている。縄文が施文された上に、斜位の多条沈線文が異方向に引かれ、波頂部を中心に３条の沈線文が垂下している。５は、口縁部に刺突文が施されている。地文に縄文が施され、横位と斜位の沈線文と多条沈線による渦巻文が施されている。６は、口縁部に沈線文が施されている。隆帯文で区画された中に縦位の沈線文が充填されている。隆帯文上に刺突文が縦に２つ並んで施されている。７は、沈線文で長方形区画が作られ、中を撚糸文で充填している。８・10は、胴部破片である。８は、地文に縄文を施し、横位の沈線文が２条と斜位の多条沈線文が施されている。断面の一部に研磨の痕が見られる。９は、注口土器の把手部分で、把手は２本の粘土紐を接着し作成している。中央に沈線文が施されている。10は、３条の平行沈線文を縦方向と斜方向に施している。

第３類土器（第21図11～23、図版29）

堀之内Ⅱ式の土器群を一括する。

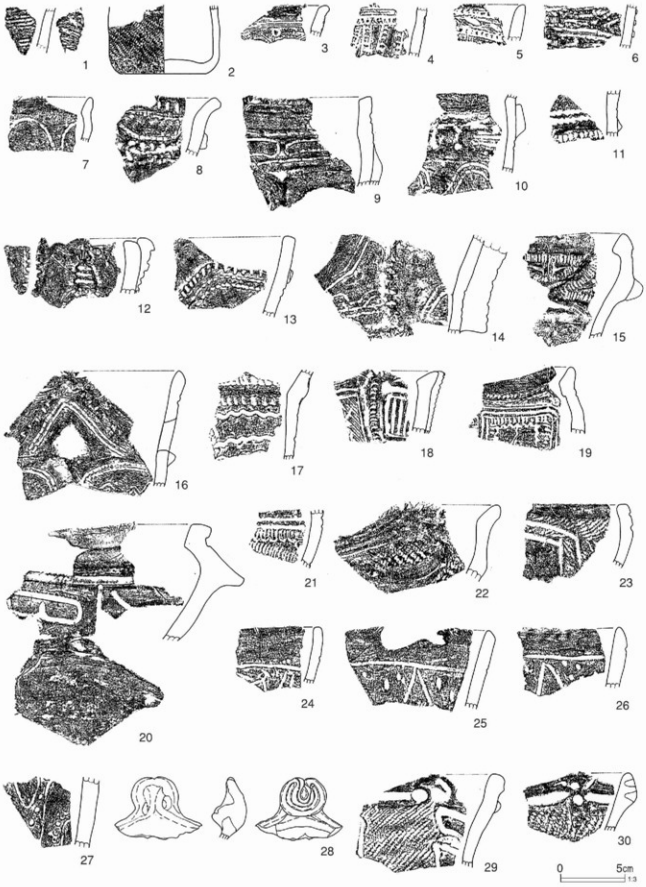
11～17・19は、口縁部の破片で、隆帯文が巡る。11～14は、横位の沈線で区画された場所に縄文が充填されている。14・17・19には、８の字状の貼付文が施されている。15は、口縁部下と下部に隆帯文が施されている。16・17・19は、隆帯文の下には原体ＲＬの縄文を施している。18・20は、胴部の破片である。18は、多条沈線文によりモチーフが描かれており、縄文が充填されている区画がある。20は、横位区画下端の沈線文が認められる。区画内は縄文が充填されている。斜位の沈線文が認められることから上部にはＸ字状のモチーフが描かれていると考えられる。23は、胴部破片で地文に原体ＲＬの縄文が施されている。上半には横位の沈線文で細長い楕円の区画が作られており、下半は、多条沈線でモチーフを描いている。堀之内Ⅱ式でも新しい段階の土器である。21・22は、底部に網代痕のある破片である。

（ｂ）石器（図版30－１・２）

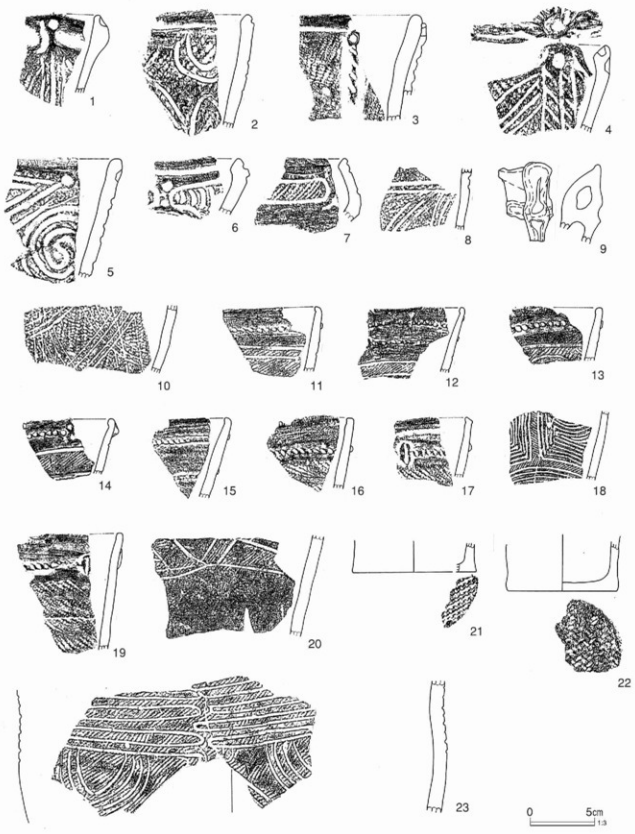
打製石斧や磨石などが出土している。主な出土石器の詳細は第２表に示した。

第２表　遺構外出土石器一覧表（縄文時代）

図版番号		種別	長さ	幅	幅	重さ
			(cm)			(g)
図版30	1 1	石匙	(5.9)	(6.6)	(2.2)	(108)
図版30	1 2	磨石	9.15	7.2	4.6	430
図版30	1 3	磨石	10	6.2	3.1	260
図版30－1－4		磨石	9	6	10.7	383
図版30－1－5		磨石	11	6.4	5.5	571
図版30－1－6		磨石	12.9	6.2	3.1	445
図版30－1－7		磨石	9	5.4	3.8	123
図版30－1－8		石錘	7.4	6	3.1	139
図版30－1－9		磨石	(5.8)	6.9	3.9	(233)
図版30	2 1	尖頭器	(6.4)	2.3	0.9	(10)
図版30	2 2	磨製石斧	(7.2)	5	3.2	(175)
図版30	2 3	石剣	(4.6)	2.6	1.9	(35)
図版30	2 4	石錘	6	(2.8)	(1.7)	35
図版30－2－5		打製石斧	12.4	5.7	2.4	175
図版30－2－6		打製石斧	(10.1)	4.6	2.2	(120)
図版30－2－7		打製石斧	(11.6)	5.9	2	165
図版30－2－8		打製石斧	11.7	6	2.2	169
図版30－2－9		打製石斧	15.2	8.25	3.2	380
図版30－2－10		打製石斧	11.2	6.5	2.2	175
図版30	2 11	打製石斧	6.9	6.2	2.7	135



第20図　遺構外出土遺物①



第21図　遺構外出土遺物②

2．古墳時代の遺構と遺物

（1）住居跡

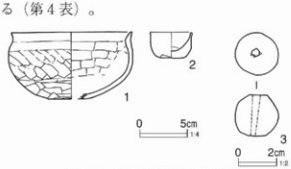
第1号住居跡（第23図、図版2）

第1号住居跡は、調査区北端のG・H－5グリッドに位置している。平面形態は方形を呈し、規模は、長軸4.48m、短軸4.40m、深さ0.40mを測る。床面はわずかな凹凸はあるものの、概ね平坦で、壁は直立に近い角度で立ち上がる。所々に硬化面が見られる。柱穴は4本検出した。配置や深さから4本とも主柱穴と考えられる。炉跡は、中央から南西の壁に寄った位置で検出した。平面形態は円形に近い形を呈し、土器が中央に据えられていた。底は良く焼けていた。貯蔵穴は、南隅に位置している。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸0.62m、短軸0.60m、深さ0.16mである。焼土の投げ込みを2ヶ所検出した。

本住居跡の所属時期は、出土土器から古墳時代中期前葉と考えられる。

第1号住居跡出土遺物（第22図、図版13・30・31）

多くの土器片、石器が出土している。図示した遺物は、土器2点、土製品1点である。1は、土師器坏で、口径12.8㎝、器高7.0㎝、底径3.8㎝、焼成は良好、色調は明褐色である。胴部外面はヘラケズリ、胴部内面はヘラケズリで、口縁部には稜を作り出している。底部には内側から孔が穿たれている。2は、手捏ね土器で、口径4.5㎝、器高2.8㎝、底径2.6㎝、焼成は良好、色調は褐色である。内外面ともに指ナデである。3は、土玉である（第4表）。



第22図　第1号住居跡出土遺物

第2号住居跡（第24・25図、図版3）

第2号住居跡は、調査区西端のF・G－3・4、グリッドに位置し、南東側は調査区外に続いている。平面形態は、方形を呈すると考えられる。規模は、長軸7.76m、（短軸6.44m、）深さ0.90mを測る。床面はほぼ平坦で、壁は直立に近い角度で立ち上がる。部分的に周溝を検出した。柱穴は1本検出した。炉跡は、中央より北西の壁に寄った位置に炉1、中央より北東壁に寄った位置に炉2を検出した。炉1の平面形態は、楕円形を呈している。底はあまり焼けていないが、覆土中から焼土を検出した。炉2の平面形態は、ほぼ円形を呈している。底は赤褐色に焼け、覆土中からも焼土を多く検出した。貯蔵穴は南東隅に位置し、平面形態は方形に近い形を呈している。規模は、長軸0.62m、短軸0.60m、深さ0.62mを測る。

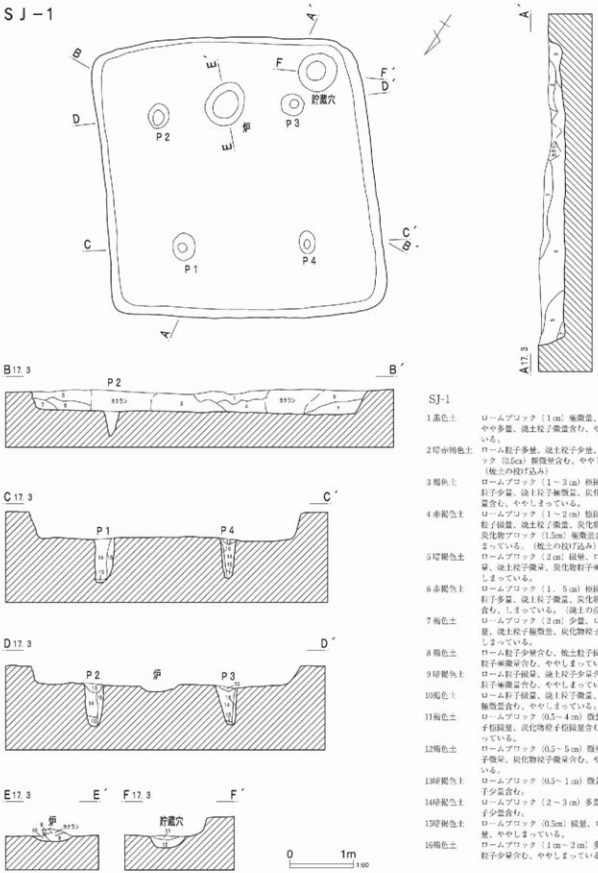
本住居跡の所属時期は、出土土器から古墳時代中期中葉と考えられる。

第2号住居跡出土遺物（第26図、図版14・30・31）

多くの土器片、石器が出土している。図示した遺物は、高坏1点、土製品4点である。1は、高坏脚部で残存高7.5㎝、裾部径17.0㎝である。外面はナデによる調整、内面は上部に指頭圧痕、下部はナデ調整が見られる。刃物傷がある。2は、土盤で直径9.3㎝、厚さ1.2㎝である。全体的にナデ調整が見られる。孔が2つ穿たれており、表面は縁辺が丸くなっている。裏面は概ね平らになっている。3～5は、土玉である（第4表）。

第3号住居跡（第27・28図、図版3）

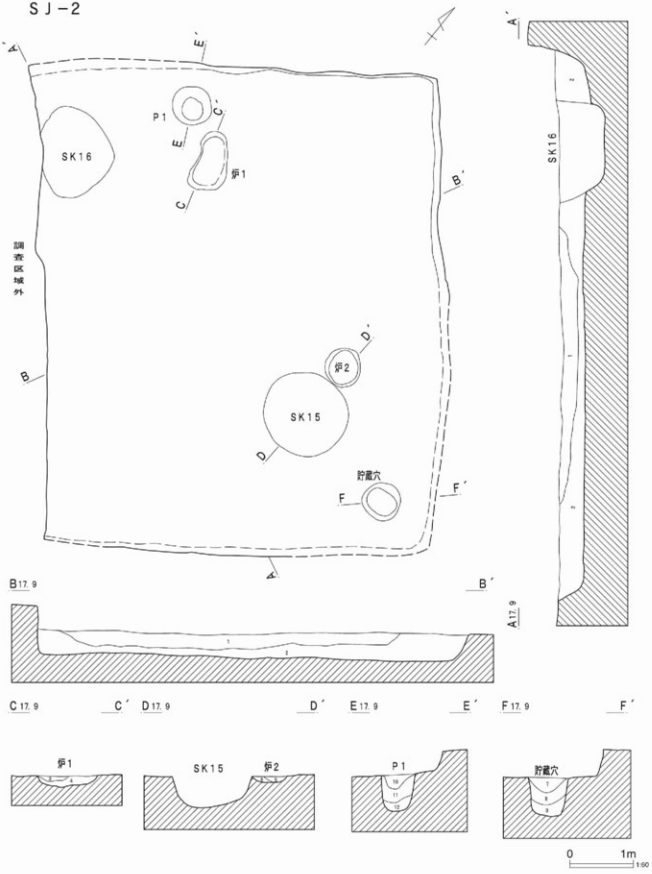
第3号住居跡は、調査区南西のG－4・5グリッドに位置し、第1号住居跡と第2号住居跡の間から検出した。平面形態は、方形に近い形を呈している。規模は、長軸5.54m、短軸5.30m、深さ0.60mを測る。床面はほぼ平坦で、壁は直立に近い角度で立ち上がる。壁際床面からは、部分的に



SJ-1

1 黒色土	ロームブロック（1㎝）極微量、ローム粒子やや多量、焼土粒子微量含む、ややしまっている。
2 暗赤褐色土	ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化物ブロック（0.5㎝）極微量含む、ややしまっている。（焼土の投げ込み）
3 褐色土	ロームブロック（1～3㎝）極微量、ローム粒子少量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む、ややしまっている。
4 赤褐色土	ロームブロック（1～2㎝）極微量、ローム粒子微量、焼土粒子微量、炭化物粒子微量、炭化物ブロック（1.5㎝）極微量含む、ややしまっている。（焼土の投げ込み）
5 暗褐色土	ロームブロック（2㎝）微量、ローム粒子少量、焼土粒子微量、炭化物粒子極微量含む、しまっている。
6 赤褐色土	ロームブロック（1．5㎝）極微量、ローム粒子多量、焼土粒子微量、炭化物粒子極微量含む、しまっている。（焼土の投げ込み）
7 褐色土	ロームブロック（2㎝）少量、ローム粒子微量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む、しまっている。
8 褐色土	ローム粒子少量含む、焼土粒子微量、炭化物粒子極微量含む、ややしまっている。
9 暗褐色土	ローム粒子微量、焼土粒子少量含む、炭化物粒子極微量含む、ややしまっている。
10 褐色土	ローム粒子微量、焼土粒子微量、炭化物粒子極微量含む、ややしまっている。
11 褐色土	ロームブロック（0.5～4㎝）微量、ローム粒子極微量、炭化物粒子極微量含む、ややしまっている。
12 褐色土	ロームブロック（0.5～5㎝）微量、ローム粒子微量、炭化物粒子微量含む、ややしまっている。
13 暗褐色土	ロームブロック（0.5～1㎝）微量、ローム粒子少量含む。
14 暗褐色土	ロームブロック（2～3㎝）多量、ローム粒子少量含む。
15 暗褐色土	ロームブロック（0.5㎝）微量、ローム粒子微量、ややしまっている。
16 褐色土	ロームブロック（1㎝～2㎝）多量、ローム粒子少量含む、ややしまっている。

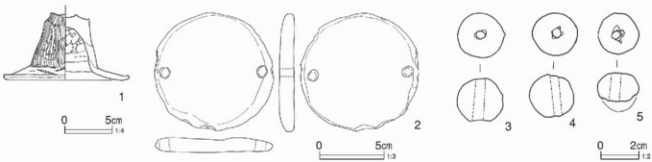
第23図　第１号住居跡遺構図



第21図　第２号住居跡遺構図①

1 黒色土　ローム ブロック（1～2cm）微量、ローム粒子多量、焼土粒子微量含む、やややわらかい。
2 暗褐色土　ローム ブロック（0.5～3cm）少量、ローム粒子少量、焼土粒子極微量、炭化物粒子微量含む、やややわらかい。
3 褐色土　ローム ブロック（0.5～1cm）微量、ローム粒子微量、焼土ブロック（1cm）微量、焼土粒子微量含む、ややしまっている。
4 暗褐色土　ローム ブロック（1cm）微量、ローム粒子微量、焼土粒子微量含む、やややわらかい
5 暗褐色土　ローム ブロック（1cm）微量、ローム粒子多量、焼土粒子多量、炭化物粒子極微量含む、ややしまっている。
6 暗褐色土　ローム ブロック（1cm）微量、ローム粒子微量、焼土ブロック（0.3～2cm）多量、焼土粒子多量、炭化物粒子極微量含む。
7 暗褐色土　ローム ブロック（1cm）微量、ローム粒子少量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む、やややわらかい。
8 褐色土　ローム ブロック（0.5cm）極微量、ローム粒子少量、炭化物粒子極微量含む、やややわらかい。
9 暗褐色土　ローム ブロック（0.3cm）極微量、ローム粒子極微量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む、ややしまっている。
10 暗褐色土　ローム ブロック（1～2cm）微量、ローム粒子少量、炭化物粒子極微量含む、ややしまっている。
11 褐色土　ローム ブロック（1cm）極微量、ローム粒子微量含む、やややわらかい
12 褐色土　ローム ブロック（2cm）微量、ローム粒子微量、炭化物粒子極微量含む。

第25図　第２号住居跡遺構図②



第26図　第2号住居跡出土遺物

途切れるが周溝を検出した。柱穴は８本検出した。配置からＰ１、Ｐ２、Ｐ４、Ｐ５が主柱穴と考えられる。炉跡は、小規模なものを含め４基検出した。全て中央付近に位置している。炉１の平面形態は、楕円形に近い形を呈している。底は焼けており、覆土中からも焼土を多く検出した。炉２、３、４は小規模で、平面形態はほぼ円形を呈している。底はあまり焼けていないが、覆土中から焼土を検出した。

本住居跡の所属時期は、出土土器から古墳時代前期末葉と考えられる。

第３号住居跡出土遺物（第29図、図版14･15･30･31）

多くの土器片、石器が出土している。図示した遺物は、土器２点、土製品２点である。１は、土師器壺で、口径は不明、胴部最大径15.1cm、残存器高12.6cm、底径5.9cm、焼成は良好、色調は明褐色である。外面はハケ調整の後、ミガキが丁寧に施されている。頸部にはハケ調整が残っている。底部にはナデつけた痕がある。胴部内面はヘラケズリが施されているが、粘土紐の痕が残っている。２は、小型器台で、口径7.5cm、器高7.0cm、底径8.8cm、焼成は良好、色調は褐色である。坏部は横方向ナデ調整、脚部は縦方向のハケ調整の後ミガキが丁寧に施されている。胴部に外側から３つの孔が穿たれている。３・４は、土玉である（第４表）。

第４号住居跡（第31図、図版４）

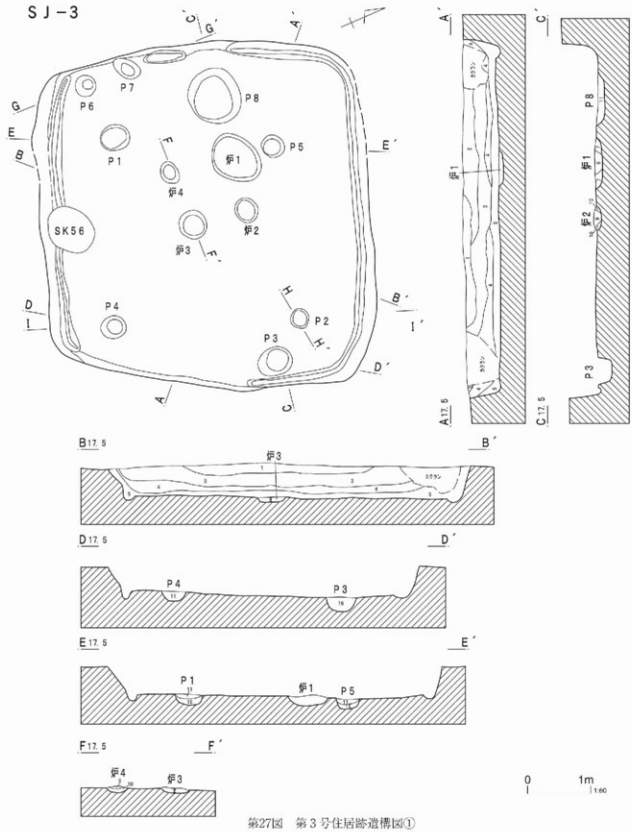
第４号住居跡は、調査区南のＧ－５・６グリッドに位置し、第５号住居跡の南側に隣接している。平面形態は、長方形に近い形を呈している。規模は、長軸4.20m、短軸2.30m、深さ0.14mを測る。柱穴は１本検出した。炉跡は、中央よりやや西に寄った位置で検出した。平面形態は、楕円形を呈している。底は焼けている。覆土中からも焼土を多く検出した。南西隅の柱穴の上から土師器片が一括で出土した。

本住居跡の所属時期は、出土土器から古墳時代中期中葉と考えられる。

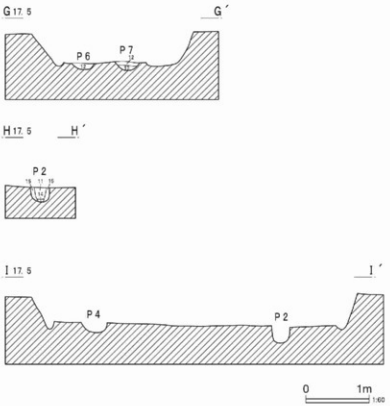
第４号住居跡出土遺物（第30図、図版15･16･31）

一括して廃棄された土器片以外はほとんど遺物は出土しなかった。図示した遺物は、土器２点、土製品１点である。１は土師器壺で、口径は楕円

形を呈している。最大径17.3cm、最小径15.0cm、器高26.3cm、底径7.0cm、焼成は良好、色調は褐色である。口縁部外面は横方向のナデ調整、胴部内外面はヘラケズリによる調整が施されている。



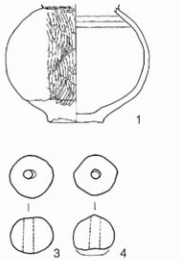
第27図　第３号住居跡遺構図①



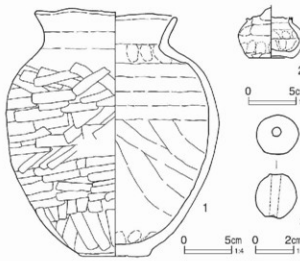
SJ-3

1 黒褐色土　ローム ブロック（1 cm）極微量、ローム粒子少量、焼土粒子極微量、炭化物粒子微量含む。
2 暗褐色土　ローム ブロック（0.5～3 cm）多量、ローム粒子少量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む、やや しまっている。
3 暗褐色土　ローム ブロック（1～2 cm）微量、ローム粒子多量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む。
4 褐色土　ローム ブロック（1～3 cm）多量、ローム粒子多量、炭化物粒子極微量含む。
5 褐色土　ローム ブロック（1～3 cm）多量、ローム粒子微量含む、やや しまっている。
6 褐色土　焼土ブロック（5～8 cm）非常に多量、焼土粒子多量含む、しまっている。
7 暗褐色土　ローム ブロック（1 cm）極微量、ローム粒子微量、焼土ブロック（1 cm）極微量含む。
8 暗褐色土　ローム ブロック（3 cm、被熱している）極微量、焼土ブロック（0.5～1 cm）少量、焼土粒子多量含む。
9 暗褐色土　ローム ブロック（1～2 cm、被熱している）少量、焼土ブロック（2 cm）多量含む。
10 暗褐色土　ローム ブロック（1 cm、被熱している）微量、焼土粒子極量含む。
11 褐色土　ローム ブロック（0.5～3 cm）微量、ローム ブロック極微量、ローム粒子極微量含む。
12 暗褐色土　ローム ブロック（1～3 cm）極微量、ローム粒子極微量、焼土粒子極微量含む。
13 褐色土　ローム ブロック（1～5 cm）非常に多量、ローム粒子多量、炭化物粒子極微量含む。
14 褐色土　ローム ブロック（0.5～3 cm）多量、ローム粒子微量含む。
15 褐色土　ローム ブロック（0.5～2 cm）少量、ローム粒子微量含む。
16 暗褐色土　ローム ブロック（0.5～2 cm）微量、ローム粒子多量、極小粒子極微量、炭化物粒子極微量含む。

第28図　第３号住居跡遺構図②



第29図　第３号住居跡出土遺物

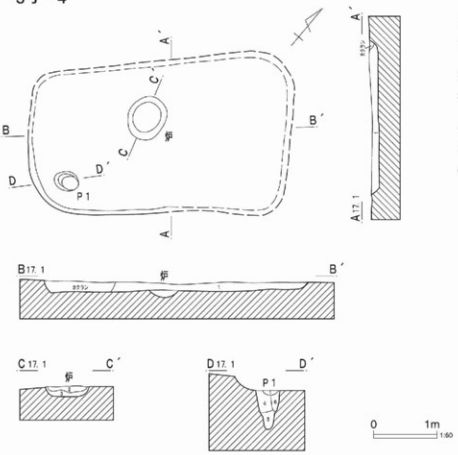


第30図　第４号住居跡出土遺物

口縁部内面もナデ調整で、頸部に指頭圧痕が見られる。２は、小型壷で、胴部最大径6.9㎝、残存高5.3㎝、底径4.6㎝、焼成は良好、色調は暗赤褐色である。胴部上半外面はナデ調整が施され、胴部下半には指頭圧痕が見られる。底部はヘラケズリによる調整が施されている。３は、土玉である（第４表）。

第５号住居跡（第32図、図版４）

第５号住居跡は、調査区南のＦ・Ｇ－５グリッドに位置し、第４号住居跡の北側に隣接している。平面形態は、長方形に近い形を呈している。規模は、長軸4.82ｍ、短軸3.56ｍ、深さ0.48ｍを測る。床面はほぼ平坦で、壁は直立に近い角度で立



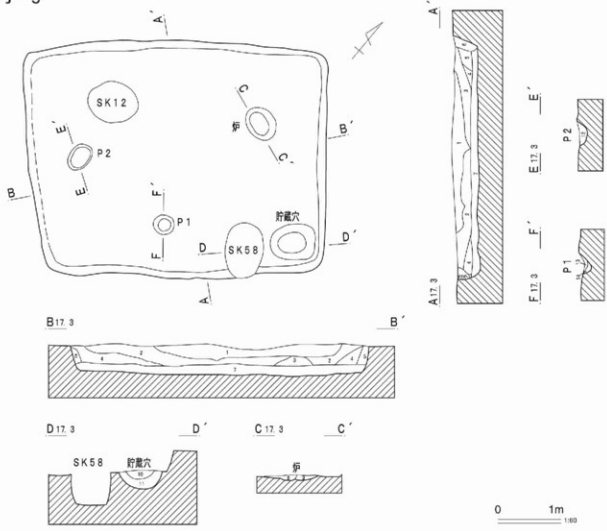
第31図　第４号住居跡遺構図

ち上がる。柱穴は２本検出した。炉跡は、中央より北に寄った位置で検出した。平面形態は、楕円形を呈している。底は焼けていて、覆土中から焼土を検出した。貯蔵穴は、東隅から検出した。規模は、長軸0.74ｍ、短軸0.54ｍ、深さ0.28ｍを測る。内部から石皿が出土した。床面直上から10数点の土錘・土錘片がまとまって出土した。Ｐ２内から小型壺が出土した。焼土の投げ込みを１ヶ所検出した。

本住居跡の所属時期は、出土土器から古墳時代中期中葉と考えられる。

第５号住居跡出土遺物（第33図、図版17・31）

多くの土器片が出土した。図示した遺物は、土製品11点である。１～７は土錘である。１は、直径3.9㎝、長さ6.6㎝、孔の径1.0㎝である。焼成は良好、色調は赤褐色である。２は、直径4.1㎝、長さ7.8㎝、孔の径0.7㎝である。焼成はやや悪く、色調は赤褐色である。３は、直径5.1㎝、長さ8.3㎝、孔の径2.7㎝である。焼成は良好、色調は褐色である。４は、直径3.8㎝、長さ5.0㎝、孔の径0.8㎝である。焼成は良好、色調は赤褐色である。５は、直径3.8㎝、長さ4.5㎝、孔の径1.0㎝である。焼成はやや悪く、色調は赤褐色である。６は、直径3.6㎝、長さ6.3㎝、孔の径1.2㎝である。焼成は良好、色調は赤褐色である。７は、推定径3.8㎝、残存長5.5㎝、孔の推定径0.8㎝である。焼成は良好、色調は赤褐色である。ヘラケズリの後にナデ調整を施している。１・４は丁寧に調整を施してある。８～11は土玉である（第４表）。



SJ-5

1 暗褐色土　ロームブロック（1～3cm）多量、ローム粒子微量、焼土粒子微量、炭化物粒子微量含む。
2 黒色土　ロームブロック（1～3cm）多量、ローム粒子微量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む。
3 暗褐色土　ロームブロック（0.2～0.5cm）少量、ローム粒子少量、焼土ブロック（0.2～0.5cm）微量、焼土粒子少量、炭化材、炭化物粒子微量含む。ややしまっている。
4 暗褐色土　ロームブロック（0.5～3cm）少量、ローム粒子微量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む。
5 黒色土　ロームブロック（1～2cm）少量、ローム粒子少量含む。
6 暗褐色土　ロームブロック（2cm）極微量、ローム粒子多量、炭化物粒子極微量含む。しまっている。
7 黒色土　ロームブロック（2～3cm）少量、ローム粒子微量、焼土粒子極微量含む、赤雲にしまっている。
8 黒褐色土　ローム粒子微量、焼土（0.5～1cm）ブロック極微量、焼土粒子少量含む。
9 暗褐色土　ロームブロック（5cm）微量、ローム粒子微量、焼土ブロック（3cm）極微量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む。
10 暗褐色土　ロームブロック（0.5～1cm）微量、ローム粒子少量、焼土ブロック（0.5～4cm）少量、焼土粒子少量、炭化物粒子極微量含む。
11 黒褐色土　ロームブロック（1～2cm）微量、ローム粒子微量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む。
12 暗褐色土　ロームブロック（2cm）微量、ローム粒子少量、炭化物ブロック（1cm）極微量、炭化物粒子微量含む。
13 黒褐色土　ロームブロック（1～3cm）多量、ローム粒子少量、炭化物粒子極微量含む、やややわらかい。
14 暗褐色土　ロームブロック（1cm）微量、ローム粒子微量、焼土粒子微量、炭化物粒子微量含む。

第32図　第５号住居跡遺構図

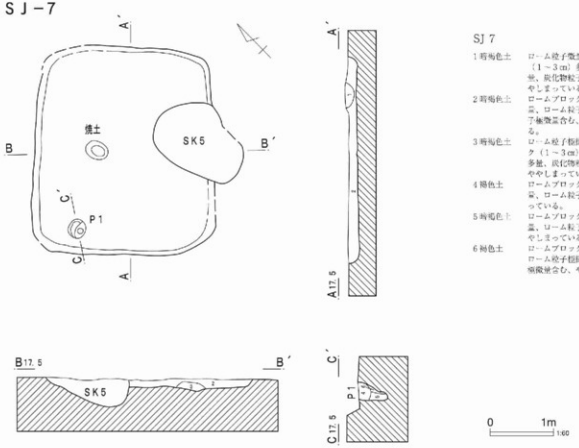
第33図　第５号住居跡出土遺物

第７号住居跡（第34図、図版５）

第７号住居跡は、調査区ほぼ中央のＥ－４グリッドに位置し、第８号住居跡の南東側に隣接している。平面形態は、方形を呈している。規模は、長軸3.44ｍ、短軸3.30ｍ、深さ0.18ｍを測る。柱穴は１本検出した。炉跡は検出しなかったが、床面に接する高さに焼土の投げ込みを１ヶ所検出した。覆土中にも焼土の投げ込みを１ヶ所検出した。

遺物は少なく、図示できる遺物はなかった。

本住居跡の所属時期は、出土土器・形態などから古墳時代中期と考えられる。



第34図　第７号住居跡遺構図

第８号住居跡（第35図、図版6）

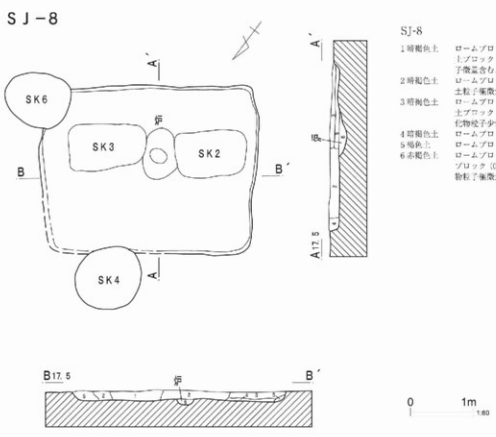
第８号住居跡は、調査区ほぼ中央のD･E－3･4グリッドに位置し、第７号住居跡の南西側に隣接している。平面形態は、長方形に近い形を呈している。規模は、長軸3.50m、短軸2.68m、深さ0.16mを測る。炉跡は、中央からやや南側に寄った位置で検出した。平面形態は、楕円形を呈している。底は焼けている。

本住居跡の所属時期は、出土土器から古墳時代中期中葉と考えられる。

第８号住居跡出土遺物（第36図、図版19）

出土遺物は少なく、図示した遺物は、高坏１点である。１は、口径17.9cm、残存高14.8cm、焼成は良好、色調は赤褐色である。全体にヘラケズリを施した後、坏部はナデ調整を施している。坏部内面は剥離が激しい。脚部は縦方向にミガキが施してある。脚部内面は粘土積上げ痕が残っている。

第36図　第８号住居跡出土遺物



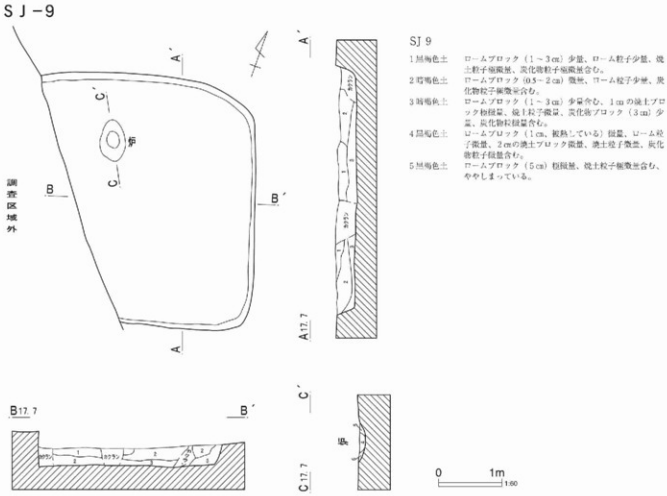
第35図　第８号住居跡遺構図

第９号住居跡（第37図、図版６・19）

第９号住居跡は、調査区西端のＥ－２・３グリッドに位置し、西側は調査区外に続いている。平面形態は、方形に近い形を呈していると思われる。規模は、長軸3.96ｍ、(短軸3.89ｍ、）深さ0.32ｍを測る。床面はほぼ平坦で、壁は直立に近い角度で立ち上がる。住居中央付近は床面が硬化していた。炉跡は、中央よりやや北西に寄った位置に検出した。平面形態は、楕円形に近い形を呈している。底は焼けている。

遺物は少なく、図示できる遺物はなかった。

本住居跡の所属時期は、出土土器から古墳時代中期中葉と考えられる。

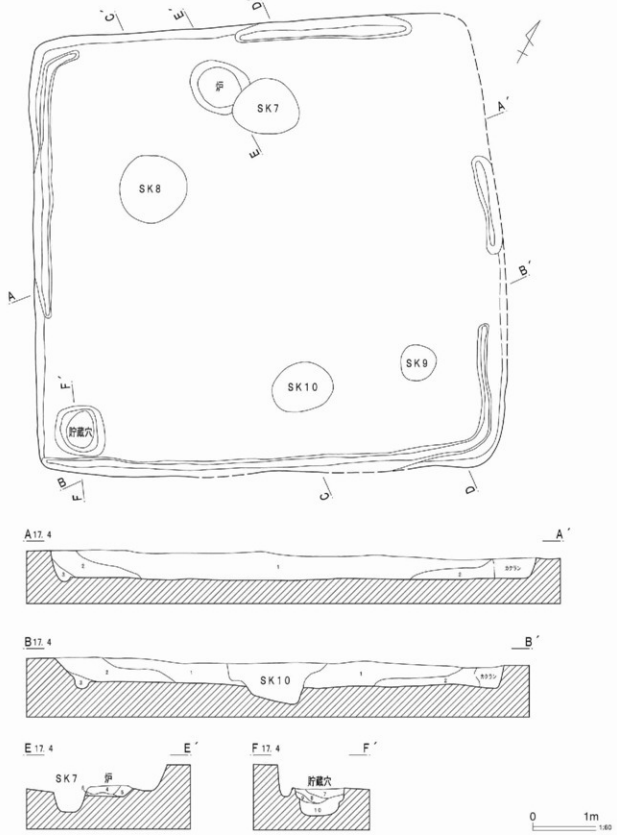


第37図　第９号住居跡遺構図

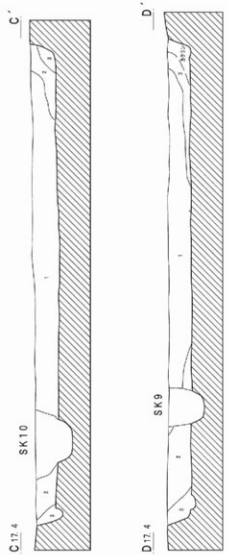
第10号住居跡（第38・39図、図版６・７）

第10号住居跡は、調査区中央のＤ・Ｅ－４・５グリッドに位置し、第16号住居の北東に隣接している。平面形態は方形を呈し、規模は、長軸7.50ｍ、短軸7.26ｍ、深さ0.45ｍを測る。床面は、概ね平坦で、壁は直立に近い角度で立ち上がる。壁際床面からは、部分的に途切れるが周溝を検出した。炉跡は、北西側の壁に近い位置で検出した。平面形態は円形に近い形を呈している。貯蔵穴は、南隅に位置している。平面形態は、方形を呈する。規模は、長軸0.79ｍ、短軸0.69ｍ、深さ0.43ｍである。

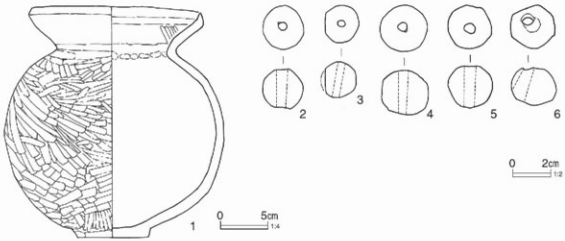
SJ－10



第38図　第10号住居跡遺構図①



第39図　第10号住居跡遺構図②



第40図　第10号住居跡出土遺物

本住居跡の所属時期は、出土土器から古墳時代中期中葉と考えられる。

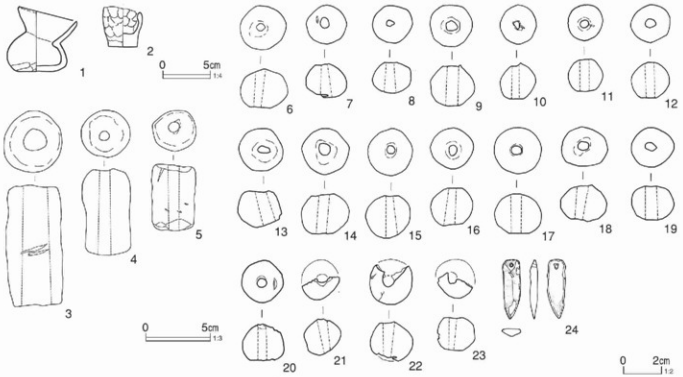
第10号住居跡出土遺物（第40図、図版19・31）

一括して出土した土器片を始め、多くの土器片が出土した。図示した遺物は、土器１点、土製品５点である。１は、土師器甕で、口径17.8㎝、器高24.5㎝、底径7.4㎝、焼成は良好、色調は褐色である。胴部外面は縦及び斜方向のヘラケズリ調整が施され、内面は剥離が激しく不明瞭だが、横方向のヘラケズリ調整が施されている。２～６は土玉である（第４表）。

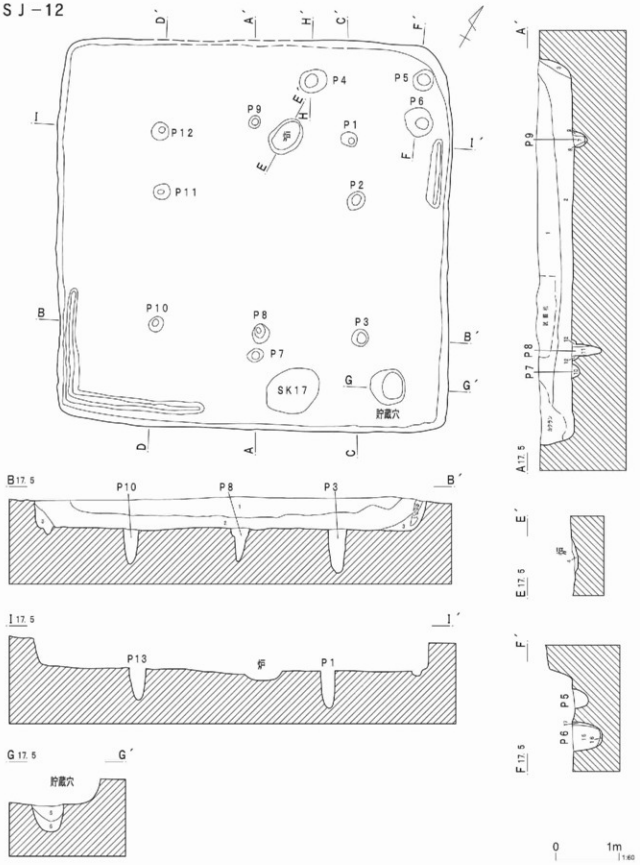
第12号住居跡（第42・43図、図版８）

第12号住居跡は、調査区北西のC・D－３・４グリッドに位置している。平面形態は、方形に近い形を呈している。規模は、長軸6.27ｍ、短軸5.93ｍ、深さ0.52ｍを測る。床面はほぼ平坦で、壁は直立に近い角度で立ち上がる。壁際床面からは、部分的に周溝を検出した。柱穴は12本検出した。配置からＰ１、Ｐ３、Ｐ10、Ｐ12が主柱穴と考えられる。Ｐ２、Ｐ９、Ｐ11は補助的な柱穴で、Ｐ７とＰ８は入り口施設に伴うものと推察される。炉跡は、中央から北に寄った位置に検出した。平面形態は、楕円形を呈している。底は焼けていて、覆土中からも焼土を多く検出した。貯蔵穴は南東隅から検出した。平面形態は、方形に近い形を呈している。規模は、長軸0.55ｍ、短軸0.54ｍ、深さ0.43ｍである。住居覆土中より炭化材を多く検出したことから、焼失住居であると考えられる。

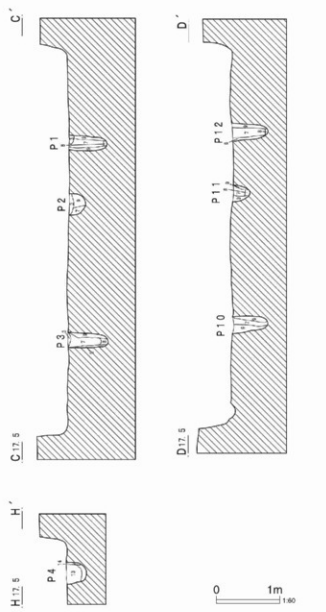
本住居跡の所属時期は、出土土器から古墳時代中期中葉と考えられる。



第41図　第12号住居跡出土遺物



第42図　第12号住居跡遺構図①



SJ-12

1 黒色土	ロームブロック（0.5～3cm）微量、ローム粒子少量、焼土粒子極微量、炭化微粒子極微量含む、やややわらかい。
2 暗褐色土	ロームブロック（0.3～1cm）少量、ローム粒子微量、焼土粒子微量、炭化物ブロック（0.5～2cm）微量、炭化微粒子微量含む、やややわらかい。
3 暗褐色土	ロームブロック（0.5～3cm）少量、ローム粒子少量、焼土粒子極微量、炭化微粒子極微量含む。
4 暗褐色土	ロームブロック（0.5～2cm、被熱している）極微量、焼土ブロック（1～5cm）非常に多量、焼土粒子少量、炭化物粒子極微量含む。
5 暗褐色土	ロームブロック（0.5～1.5cm）微量、ローム粒子微量、焼土粒子極微量、炭化微粒子少量含む、やややわらかい。
6 褐色土	ロームブロック（1～2cm）多量、ローム粒子極微量、焼土粒子極微量、炭化微粒子極微量含む、非常にしまっている。
7 暗褐色土	ロームブロック（1～2cm）微量、ローム粒子微量含む、やややわらかい。
8 暗褐色土	ロームブロック（2～3cm）多量、ローム粒子微量含む、非常にしまっている。
9 褐色土	ロームブロック（1～3cm）少量、ローム粒子微量、炭化物粒子極微量含む、しまっている。
10 褐色土	ロームブロック（1～3cm）多量、ローム粒子微量、焼土粒子極微量含む。
11 暗褐色土	ロームブロック（0.5cm～2cm）少量、ローム粒子少、炭化物粒子極微量含む。
12 暗褐色土	ロームブロック（1～2cm）少量、ローム粒子微量、炭化物ブロック（2cm）極微量、炭化物粒子極微量含む。
13 極暗褐色土	ロームブロック（1～2cm）極微量、ローム粒子少量、焼土粒子少量、炭化微粒子微量含む、やややわらかい。
14 極暗褐色土	ロームブロック（1～2cm）微量、ローム粒子少量、焼土粒子極微量、炭化微粒子極微量含む、ややしまっている。
15 暗褐色土	ロームブロック（0.5～1cm）極微量、ローム粒子赤茶に多量、炭化物粒子少量含む、やややわらかい。
16 褐色土	ロームブロック（1～2cm）多量、ローム粒子極微量含む、しまっている。
17 褐色土	ロームブロック（1～2cm）少量、ローム粒子非常に多量、炭化微粒子極微量含む、やややわらかい。

第43図　第12号住居跡遺構図②

第12号住居跡出土遺物（第41図、図版20・21・27・28・30・31）

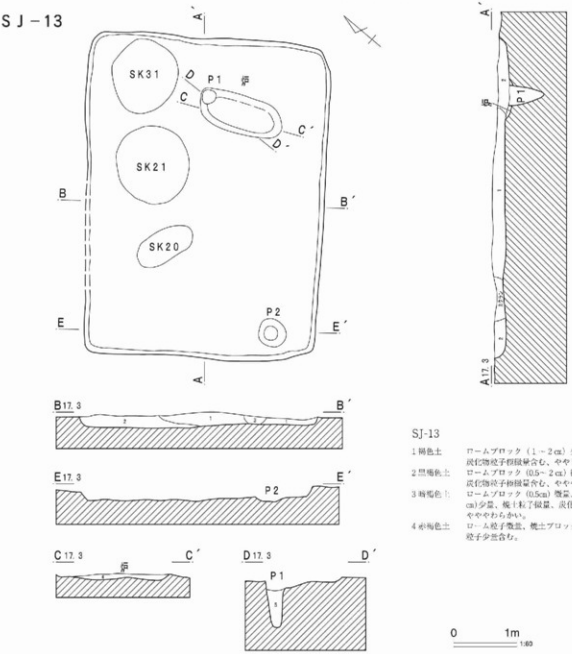
土器片が多く出土した。図示した遺物は、土器2点、土製品21点、石製品1点である。1は、土師器小型壺で、口径6.1cm、器高6.8cm、底径3.7cm、焼成は良好、色調は暗赤褐色である。全体的に傾いている。口縁部外面は横方向のナデ調整、胴部外面はヘラケズリの後、上半のみナデ調整が施されている。内面はヘラケズリが施され、頸部と底部に粘土積上げ痕と指頭圧痕がある。2は、手捏ね土器で、口径4.1cm、器高4.3cm、底径3.1cm、焼成は良好、色調は褐色である。内外面ともに成形時の指頭圧痕が残っている。3～5は土錘である。3は、直径4.6cm、長さ9.4cm、孔の径

1.9㎝焼成は良好、色調は赤褐色である。刃物傷と思われる痕が6箇所ある。4は、直径3.7㎝、長さ6.7㎝、孔の径0.8㎝、焼成は良好、色調は褐色である。5は、直径3.4㎝、長さ5.7㎝、孔の径0.9㎝、焼成は良好、色調は赤褐色である。3～5は、ヘラケズリの後にナデ調整を丁寧に施している。6～23は土玉である（第4表）。24は、剣形石製模造品で、長軸3.1㎝、短軸1.0㎝、厚さ0.4㎝である。

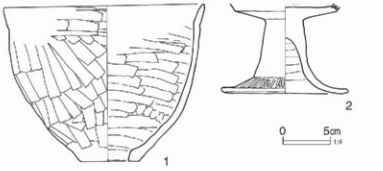
第13号住居跡（第44図、図版8・9）

第13号住居跡は、調査区北側のC－5・6グリッドに位置している。平面形態は、長方形を呈している。規模は、長軸5.10m、短軸3.80m、深さ0.20mを測る。柱穴は2本検出した。平面形態は、長楕円形を呈している。底はあまり焼けていないが、覆土中から焼土を検出した。

本住居跡の所属時期は、出土土器から古墳時代中期中葉と考えられる。



第44図　第13号住居跡遺構図



第45図　第13号住居跡出土遺物

第13号住居跡出土遺物（第45図、図版21･22･31）

一括して出土した土器を始め、多くの土器片が出土した。図示した遺物は、土器２点、土製品１点である。１は、土師器甕で、口径21.5cm、器高16.5cm、底径6.5cm、底部孔径5.5cm、焼成は良好、色調は明褐色である。口縁部外面は横方向のヘラケズリで、胴部外面は斜方向のヘラケズリが施されている。口縁部・胴部内面は横方向のヘラケズリが施され、成形時の指頭圧痕が一部残っている。２は、土師器高坏の脚部で、残存高9.9cm、裾部径13.3cm、焼成は良好、色調は暗赤褐色である。脚部外面は櫛状工具による整形痕が残る。裾部外面はミガキが施されている。脚部内面には粘土積上げ痕が残っている。外面は２次被熱による剥離が激しい。坏部は平らに打ちかかれており、２次被熱を受けていることからもカマドの支脚として使われたと考えられる。３は、土玉である（第３表）。

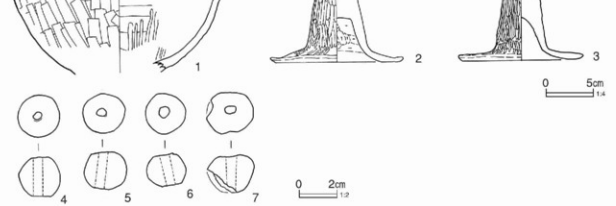
第14号住居跡（第47図、図版９）

第14号住居跡は、調査区西のD－７、E－６・７グリッドに位置する。平面形態は、方形を呈している。規模は、長軸5.79m、短軸5.52m、深さ0.53mを測る。柱穴は１本検出した。

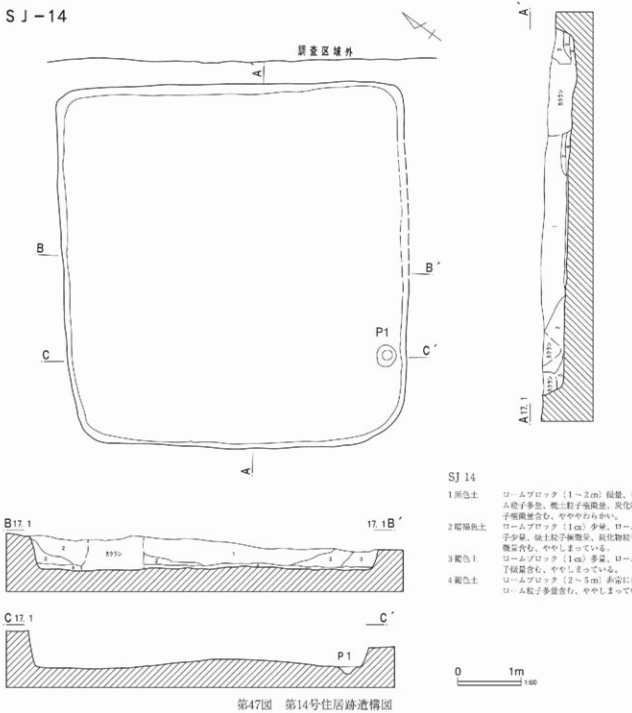
本住居跡の所属時期は、出土土器から古墳時代中期と考えられる。

第14号住居跡出土遺物（第46図、図版23･30･31）

多くの土器片と石器が出土した。図示した遺物は、土器３点、土製品４点である。１は、広口鉢形の土師器甕と思われる。口径23.0cm、残存高15.4cm、焼成は良好、色調は褐色である。口縁部から胴部上半にかけての外面は、横方向のナデ調整が施され、その下は縦方向のヘラケズリ、胴部



第46図　第14号住居跡出土遺物



第47図　第14号住居跡遺構図

下半は斜方向のヘラケズリ調整が施されている。内面は磨耗により不明瞭だが、横方向のヘラケズリが施された後、胴下半部に縦方向のミガキのような調整が施されている。外面に煤が付着している。2・3は土師器高坏である。2は、口径17.3㎝、器高14.8㎝、裾部径13.2㎝、焼成は良好、色調は橙である。坏部外面、脚部外面はヘラケズリをした後、ナデ調整をし、縦方向のミガキを施している。坏部内面は、ナデ調整の後、縦方向のミガキを施している。脚部内面は丁寧にナデ調整が施されている。坏部下端には稜が作られている。3は、口径15.3㎝、器高14.9㎝、裾部径13.7㎝、焼成は良好、色調は橙である。調整は2と同様である。4～7は土玉である（第4表）。

第15号住居跡（第49図、図版10）

第15号住居跡は、調査区西のＥ・Ｆ－３・４グリッドに位置し、第２号住居跡の北側に隣接している。平面形態は、方形を呈している。規模は、長軸5.40ｍ、短軸5.30ｍ、深さ0.50ｍを測る。床面はほぼ平坦で、壁は直立に近い角度で立ち上がる。壁際床面からは、一部に周溝を検出した。柱穴は、４本検出した。配置からＰ１、Ｐ３、Ｐ４が主柱穴と考えられる。炉跡は、中央よりやや北西に寄った位置に検出した。平面形態は、楕円形に近い形を呈している。底は焼けていて、覆土中からも焼土を多く検出した。

本住居跡の所属時期は、出土土器から古墳時代前期末葉と考えられる

第15号住居跡出土遺物(第48図、図版24･25･30･31)

土器片が多く出土した。図示した遺物は、土器２点、土製品５点である。１は、土師器壺で、胴部最大径16.4㎝、残存高19.2㎝、底径5.6㎝、焼成は良好、色調は橙である。胴部外面はヘラケズリの後、縦方向のミガキ調整が施されている。胴部下半の一部に横方向のミガキ、底部には斜め方向のミガキが見られる。内面は磨耗が激しく不明瞭ではあるが、ハケメがわずかに確認できる。粘土積上げ痕が散見できる。２は、土師器甕で、口径14.9㎝、残存高18.1㎝、焼成は良好、色調は褐色である。複合口縁になっている。胴部外面は、櫛状工具による整形痕が一部残る。上半は横方向のヘラケズリで、その下は斜方向のヘラケズリが施されている。内面は磨耗が激しく不明瞭だが、胴部上半は横方向のヘラケズリ、その下は斜方向のヘラケズリが施されている。３～７は土玉である（第４表）。

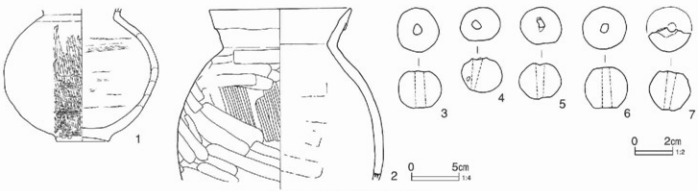
第16号住居跡（第50図、図版10）

第16号住居跡は、調査区ほぼ中央のＥ－４グリッドに位置し、北西に第５号住居跡、北東に第10号住居跡が隣接している。平面形態は、方形を呈している。規模は、長軸4.30ｍ、短軸4.22ｍ、深さ0.30ｍを測る。床面はほぼ平坦で、壁は直立に近い角度で立ち上がる。壁際床面からは、一部周溝を検出した。柱穴は３本検出した。いずれも浅く、主柱穴とは考えにくい。炉跡は２基検出した。中央よりやや北西に寄った位置に炉跡１、ほぼ中央に炉跡２を検出した。炉跡１は、第59号土壙に壊され不明確だが、円形に近いと思われる。炉跡２も第35号土壙に一部壊されている。平面形態は、円形に近い形を呈していると思われる。底は焼けていて、覆土中からも焼土を多く検出した。貯蔵穴は、南東隅に位置している。平面形態は円形である。規模は、長軸0.50ｍ、短軸0.48ｍ、深さ0.46ｍを測る。

本住居跡の所属時期は、出土土器から古墳時代中期と考えられる。

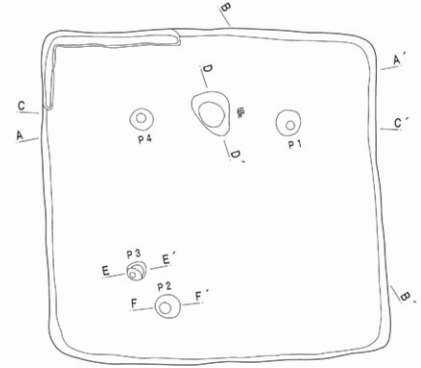
第16号住居跡出土遺物（第51図、図版25・31）

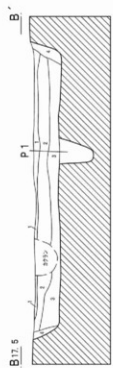
出土遺物はやや少なかったが、土器片などが出土した。図示した遺物は、土製品１点である。１は土玉である（第４表）。

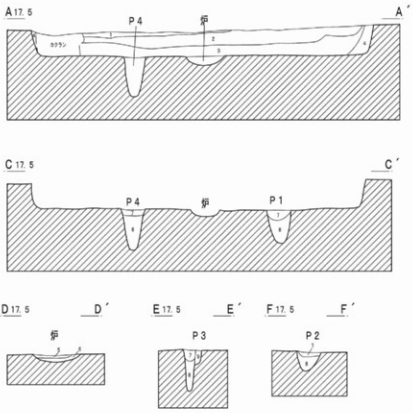


第48図　第15号住居跡出土遺物

SJ－15







SJ 15

1 黒色土　ローム ブロック（0.5～1cm）少量、ローム粒子少量、焼土粒子極微量、炭化物粒子極微量含む、ややかたい。

2 暗褐色土　ローム ブロック（0.5～2cm）微量、ローム粒子少量含む、やややわらかい。

3 黒色土　ローム ブロック（0.5～2cm）少量、ローム粒子多量、焼土粒子微量、炭化物粒子微量含む、やや しまっている。

4 褐色土　ローム ブロック（2～3cm）赤茶に多量、ローム粒子極微量、

5 粒状褐色土　ローム ブロック（0.3cm）極微量、ローム粒子極微量、焼土ブロック

6 暗褐色土　ローム ブロック（0.5～1cm、焼熟している）極微量、ローム粒子炭化物粒子極微量含む。

7 暗褐色土　ローム ブロック（0.3～1cm）微量、ローム粒子少量、炭化物粒子

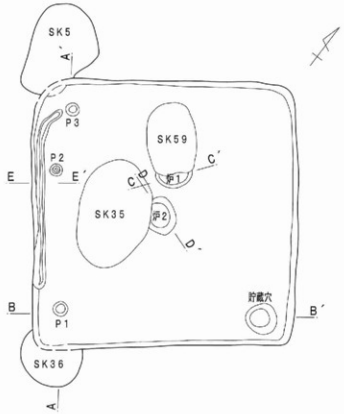
8 褐色土　ローム ブロック（1cm）少量、ローム粒子微量、炭化物粒子極微量含む、やややわらかい。炭化物粒子極微量含む、しまっている。（0.3cm）粗微量、焼土粒子少量、炭化物粒子極微量含む。極微量、焼土ブロック（0.3～1cm）多量、焼土粒子少量、粘質量含む、やややわらかい。

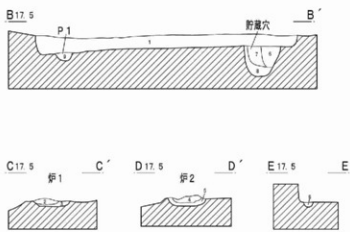
9 褐色土　ローム ブロック（0.3～1cm）多量、ローム粒子極微量、炭化物粒子極微量含む、ややしまっている。

0　1m
1:60

第49図　第15号住居跡遺構図

SJ－16





SJ-16

1 暗褐色土	ローム ブロック（0.5～3㎝）少量、ローム粒子少量、焼土粒子微量、炭化物粒子微量含む、ややしまっている。
2 暗褐色土	ローム粒子微量、焼土ブロック（1～3㎝）非常に多量、焼土粒子多量含む、しまっている。
3 褐色土	ローム ブロック（0.5～1㎝）少量、ローム粒子多量、焼土粒子微量、炭化物粒子極微量含む、しまっている。
4 暗褐色土	ローム粒子微量、焼土ブロック（1～3㎝）多量、焼土粒子少量含む、非常にしまっている。
5 褐色土	ローム ブロック（1㎝）多量、ローム粒子微量、焼土ブロック（0.5㎝）微量、焼土粒子微量、炭化物粒子極微量含む、しまっている。
6 暗褐色土	ローム ブロック（0.3～0.5㎝）非常に多量、ローム粒子少量含む、やややわらかい。
7 黒褐色土	ローム ブロック（0.5～1㎝）少量、ローム粒子少量、炭化物焼子極微量含む、ややしまっている。
8 暗褐色土	ローム ブロック（0.5～2㎝）微量、ローム粒子微量、炭化物焼子極微量含む、ややしまっている。
9 暗褐色土	ローム ブロック（1～2㎝）極微量、ローム粒子少量、1㎝の炭化物ブロック微量、炭化物焼子微量含む、やややわらかい。

第50図　第16号住居跡遺構図

第51図　第16号住居跡出土遺物

（2）土壙

第19号土壙（第53図、図版11・12）

第19号土壙は、調査区南西のG－5グリッドに位置し、第3号住居跡の東で検出した。平面形態は長楕円形を呈している。規模は、長軸1.71m、短軸0.84m、深さ0.77mである。所属時期は、出土土器から古墳時代中期中葉と考えられる。

第19号土壙出土遺物（第52図、図版25・26）

遺物が大量に出土した。図示したのは、土器1点である。1は、土師器甕で、胴部最大径23.0cm、残存高21.4cm、底径7.5cm、焼成はやや悪く、色調は褐色である。胴部外面は横方向の後、斜方向のヘラケズリ調整が施されている。内部は剥離によって明瞭ではないが、胴部上半は斜方向の後、縦方向のヘラケズリ調整が施されている。胴部外面に炭化物が付着している。

第28号土壙（第53図、図版26）

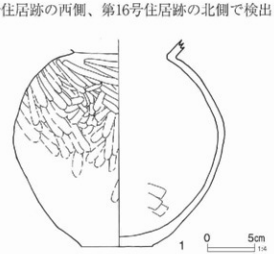
第28号土壙は、D・E－4グリッドに位置し、第10号住居跡の西側、第16号住居跡の北側で検出した。平面形態は、楕円形に近い形を呈している。規模は、長軸2.81m、短軸1.55m、深さ0.27mである。高坏の坏部が出土している。所属時期は、出土土器から古墳時代中期と考えられる。

第42号土壙（第54図）

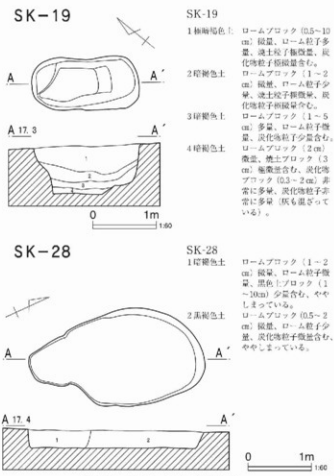
第42号土壙は、調査区北端のB－4グリッドに位置した。平面形態は、長楕円形を呈している。規模は、長軸1.02m、短軸0.48m、深さ0.25mである。高坏の破片が1点出土した。所属時期は、出土土器から古墳時代と考えられる。

第44号土壙（第54図）

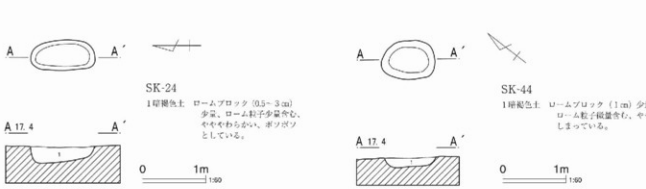
第44号土壙は、調査区北端のC－4グリッドに位置した。平面形態は、長楕円形を呈している。規模は、長軸0.84m、短軸0.62m、深さ0.16mである。土師器坏の口縁部が出土した。所属時期は、出土土器から古墳時代と考えられる



第52図　第19号土壙出土遺物



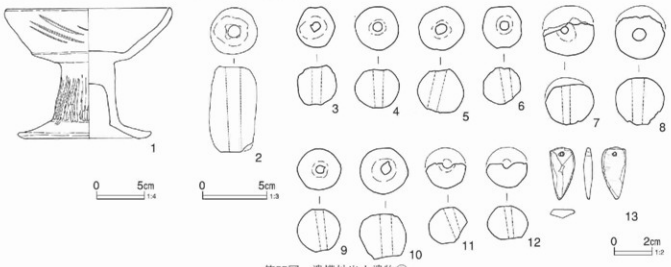
第53図　第19・28土壙遺構図



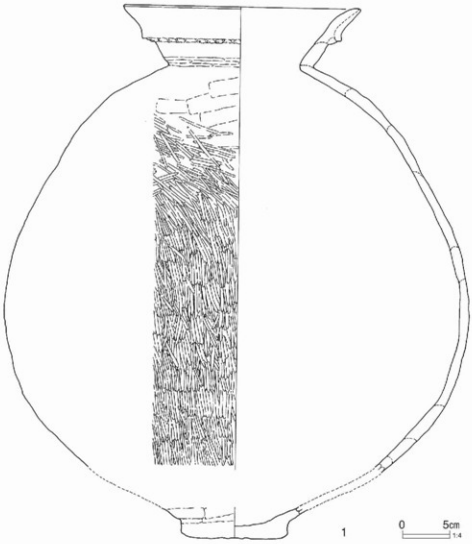
第54図　第42・44号土壙遺構図

（3）遺構外出土遺物（第55図・56図、図版7・27・28・31）

遺構外からも多数の遺物が出土している。図示したのは、土器2点、土製品10点、石製品1点である。第55図1は、土師器高坏である。推定口径19.4cm、器高13.8cm、裾部推定径13.4cm、焼成は良好、色調は橙である。坏部内外面は横方向のナデ調整が施されている。脚部外面はヘラケズリの後、縦方向のミガキが施されている。脚部内面・裾部内外面はナデ調整が施されている。刃物傷がある。2は、土錘である。口径3.7cm、孔の径1.0cm、長さ6.7cm、焼成は良好、色調は黄褐色である。ヘラケズリの後、ナデ調整が丁寧に施されている。3～12は土玉である（第4表）。13は、剣形石製模造品で、長軸2.8cm、短軸1.3cm、厚さ0.5cmである。第56図1は、土師器甕である。第11号住居の最上層から胴部の破片が重なった状態で出土した。同じ層から炭層が確認されたことからも、人為的に埋められたと考えられる。口径は24.2cm、推定胴部最大径48.4cm、残存高49.4cm、推定器高56.8cm、底径11.2cmである。胴部破片と底部破片は接合できなかったが、出土状況から同一個体と判断した。焼成は良好、色調は橙である。複合口縁で、粘土をナデ付けた痕が残っている。外面口縁部はナデ調整だが、頸部は横方向のミガキが施されている。胴部外面はヘラケズリの後、上半は横方向・斜方向のミガキが施され、その下は縦方向のミガキが施されている。内面は磨耗が激しく不明瞭だが、横方向のヘラケズリが施されている。所属時期は古墳時代中期前葉と考えられる。



第55図　遺構外出土遺物①



第56図　遺構外出土遺物②

第３表　古墳時代住居跡出土石器一覧表

図版番号	出土遺構	出土層位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
図版30－３－１	SJ－１	上層	砥石	4.2	3	2.8	40
図版30　３　２	SJ　２	下層	砥石	4.15	3.25	3	24
図版30　３　３	SJ　３	下層	砥石	(8.5)	2.85	2.2	(84)
図版30　３　４	SJ　５	貼床穴	石皿	17	23.6	7.8	3,353
図版30－３－５	SJ－10	下層	磨石	13.5	6.2	2.6	360
図版30－３－６	SJ－10	下層	磨石	7.2	5.1	2.9	125
図版30－３－７	SJ－14	下層	磨石	4.75	4.9	3.5	22.5
図版30－３－８	SJ－15	上層	磨石	(3.7)	3.7	(2.8)	(47.5)
図版30－３－９	SJ－15	上層	砥石	3.2	3.3	2.7	19

3．奈良時代・平安時代の遺構と遺物

（1）住居跡

第6号住居跡（第58図、図版5）

第6号住居跡は、調査区中央よりやや西に寄ったE－6グリッドに位置し、第14号住居跡の南西で検出した。平面形態は、方形を呈している。規模は、長軸2.88m、短軸2.44m、深さ0.44mを測る。床面はほぼ平坦で、壁は直立に近い角度で立ち上がる。中央よりやや北東に寄った位置にピットを検出した。ピットの上から須恵器が出土し、そのドは粘土粒子を多く含んだ土を検出した。鉄製品や炉壁の一部・鉄滓なども出土している。

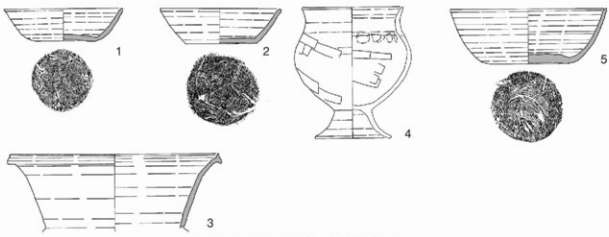
本住居跡の所属時期は、出土土器から9世紀初頭に属すると考えられる。

第6号住居跡出土遺物（第57図、図版18・19）

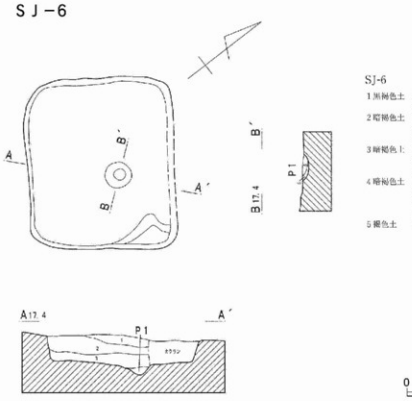
図示した土器は、4点である。1・2は、須恵器坏である。1は、南比企産の須恵器坏の完形で胎土に白色針状物質が含まれている。焼成は良好で灰色を呈している。口径12.6cm、底径6.7cm、器高3.4cmである。底部は、回転糸切で未調整である。口縁部・胴部の一部と内側底部に炭化物の付着があり、灯明皿として使用されていたと考えられる。2は、坏の完形で産地は不明である。焼成が悪く、部分的に橙色の部分が見受けられる。全体としては白灰色を呈している。口径12.7cm、底径7.5cm、器高3.7cmである。底部は、回転糸切で未調整だと思われる。内側底部の所々に炭化物が付着している。胴部や口縁部にも若干の炭化物が見られる。1の須恵器同様、灯明皿として使用されていたと考えられる。3は、南比企産の須恵器甕の口縁部破片である。白色針状物質が多量に含まれている。焼成は良く、灰色を呈している。推定口径22.2cm、底径・器高は、不明である。4は、土師器台付甕である。焼成は良く、暗褐色を呈し、残存率は40%である。推定口径11.0cm、底径8.2cm、器高13.8cmである。全体的に摩滅が激しいが口縁部と脚部の内外にナデ調整が見られる。胴部は、斜め方向のヘラ削りによる調整が見られる。内側には粘土を積み上げた痕跡が残っており、指頭圧痕が見られる。1・3は、鳩山窯跡群HBⅥ期と考えられる。

（2）遺構外出土遺物（第57図、図版27）

第57図5は、須恵器椀で丁寧に調整されており、焼成も良好である。白色針状物質を大量に含んでいる。推定口径16.6cm、底径7.4cm、器高5.8cmである。底面は回転糸切痕があり、周辺部が整形されている。鳩山窯跡群HBⅣ期と考えられる。炉壁の一部や鉄滓も出土している。



第57図　第6号住居跡・遺構外出土遺物



第58図　第６号住居跡遺構図

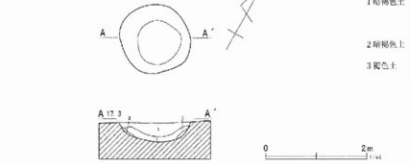
４．その他の時代の遺構と遺物

（１）土壙

縄文時代、古墳時代に所属すると思われる土壙以外に20基の土壙を検出した。これらの土壙は、平面形態や覆土から近世の土壙と考えられる。

第27号土壙（第58図・図版12）

第27号土壙は、Ｃ・Ｄ－４グリッドに位置し、第12号住居跡の東に隣接している。平面形態は、円形を呈している。覆土中からは、大量の炭化材を検出した。規模は、長軸1.37m、短軸1.35m、深さ0.38mである。遺物は出土していない。



第59図　第27号土壙遺構図

Ⅴ　調査のまとめ

1．調査の成果

今回報告した諏訪久保遺跡の調査の成果としていくつかの事柄があげられる。

縄文時代では、早期の土器片の出土、諸磯式期の住居跡の検出、称名寺式期のピットの検出などがある。町内で行われた、いままでの発掘調査により蓄積された成果と合わせると、縄文時代の早期から晩期までの遺構が確認されたことになる。

古墳時代では、中期の住居跡が14軒検出されたことで集落の様相の一端が明らかとなった。また、土錘や土玉が数多く出土したことは、生業の一面である漁業のあり方を復元するための良い資料となる。これまで伊奈町では前期と後期の集落は確認されていたが、中期の集落は発見されておらず、人々の動向がわからなかった。埼玉県南部でも中期の集落はほとんど発見されていない。今回の発掘調査で得られた資料は、今後の県内における古墳時代の集落研究において重要な資料となるだろう。

本章では、出土遺物から検討した古墳時代の住居跡をⅠ期からⅣ期までに時期区分し、集落の変遷過程を提示してみたい。また、土錘・土玉の一覧表をもとにいくつか検討していきたい。

（1）古墳時代の集落の変遷について

Ⅰ期　諏訪久保遺跡の成立期で、第３号住居跡、第15号住居跡の２軒が該期に位置づけられる。第３号住居跡からは小型器台が出土している。第３号住居跡出土壺と第15号住居跡出土壺には類似性が見られる。

五領Ⅲ式期に相当し、４世紀末と考えておきたい。ただし、第15号住居跡の出土遺物を見ると、所属時期は若干下る可能性がある。

Ⅱ期　一時住居数が減少する時期で、第１号住居跡のみが該期に位置づけられる。口縁部が大きく外反する坏、脚部から裾部への変換点が鋭く屈曲している高坏などが出土している。遺構外出土とした大型の甕もこの時期の遺物と考えられる。

和泉Ⅰ式期でも新相と思われ、５世紀前葉と考えられる。Ⅰ期とは少し断絶があるようである。

Ⅲ期　再び住居が増え始める時期で、第４号住居跡、第８号住居跡、第12号住居跡、第14号住居跡の４軒が該期に位置づけられる。長脚で、裾部端が上がる高坏が出土している。第14号住居跡からは、カマド出現以前の広口鉢形の甕と思われる土器が出土している。第12号住居跡は、他の住居跡に比べて大型である。遺物が大量に出土した第19号土壙もこの時期の遺構と考えられる。

和泉Ⅱ式期前半で５世紀中葉と考えておきたい。

Ⅳ期　諏訪久保遺跡の隆盛期で、第２号住居跡、第５号住居跡、第９号住居跡、第10号住居跡、第13号住居跡の５軒が該期に位置づけられる。第２号住居跡出土の高坏は短脚になっており、刃物を研いだとされる痕が残っている。試掘調査時にも第２号住居跡周辺から同様の高坏が出土している。第10号住居跡からは口唇部が直立し、断面三角状になる甕が出土しており、夏目西遺跡第８号住居跡出土の甕と類似している。第13号住居跡から出土した高坏は、支脚として２次使用されたと思われる。第２号住居跡と第９号住居跡は調査区南西端に位置し、調査区外へと続いている。第２号住居跡、第10号住居跡は他の住居跡に比べて大型で、Ⅲ期から大型の住居と小型の住居の組み合わせが見られる。

和泉Ⅱ式期後半で５世紀後葉と思われる。

（2）土錘・土玉について

今回の調査では土錘・土玉という漁業に使われたと考えられている遺物（谷口1996など）が多く出土した。これまで土錘・土玉についての研究は多く行われている。使用方法の研究では、網に装着していたとする説が多く唱えられている（大野1991・新里1992など）。また、釣漁にも使用された可能性があるとする説も出されている（福田1994・谷口1999）。網に装着したとする説では、錘の種類の差は漁場や対象魚種による差であると述べられている（田部井1987）。形態・大きさ・重さからの分類も行われている（福田1994・谷口1996）。谷口桑氏は16種類に分類しており、福田聖氏はA～C類に大別し、それぞれを細分して14種類に分類している。流域ごとの分布についての様相をまとめた研究もある（田部井1987・福田1994）。

諏訪久保遺跡における土錘について見てみると、第5号住居跡で7個体、第12号住居跡では3個体出土しており、遺構に伴わない1個体を含めて11個体出土した。第5号住居跡では破片が多く出土しており、その出土状況は床面（第7層）からまとまった状態であった。意図的にその場所に置いたと思われる。破片が多いことから廃棄の可能性が高いが、第7層は床とも考えられ、床に漁労具を埋めるような何らかの祭祀を行ったとも考えられる。第12号住居跡でもややまとまって出土している。

形態は全て円柱形で、断面は長方形である。特別に大きなものを除けば、径・孔径・長さ・重さに偏りは見られない。谷口氏の分類ではⅠ形態にあたり、大きさで細別されたa～cの全種類が出土しており、福田氏の分類では全て60g以上であるのでB4＋にあたるため、諏訪久保遺跡出土の土錘については、定型的な製作と使用がなされていたと思われる。

土玉は、調査区全域で55点と多量に出土している。遺構外からの出土は10点で、欠損している土玉も13点と少ない。いずれも孔には使用痕がある。土玉に特大のものはなく、概ね径3.0㎝、孔径0.5㎝、重さ7.5g前後で、土錘と同様に定型的である。

第12号住居は焼失住居と考えられ、床に接し、黒く焼けた土玉も出土している。18点の土玉が出土しており、17点は中層より下からの出土である。6点がややまとまって出土した以外は住居全体から出土している。網などは残りにくく、そのあり方は復元しづらい。住居もどのような状況で焼失したかは確かではないが、土玉の使用方法に一考与える事例になるのではないかと思われる。

土玉は網漁に使われたとしても投網などの小規模な網漁であったと考えられている。また、流れの弱い湖沼や小河川での利用であったと思われる。諏訪久保遺跡の周辺はまさに小河川が多く、低地も近い。また、土玉が単独で出土する例が多かったことは、釣漁を行う際の錘として使用されたことを伺わせる。いずれも漁業としては小規模である。諏訪久保遺跡は、農閑期や農業の補助的に漁業を行うという生業のあり方で生活していた人々の集落であったと推測される。

第4表　土錘・土玉計測表

土錘

※〔 〕内の数値は残存値

No	遺構名	出土層位	残存率	径	穴の径	重さ	長さ
			(%)	(cm)		(g)	(cm)
1	SJ－5	下層	100	3.9	1	105	6.6
2	SJ－5	下層	90	4.1	0.7	107.5	7.8
3	SJ－5	下層	100	5.1	2.7	185	8.35
4	SJ－5	下層	70	3.8	0.8	〔60〕	〔5〕
5	SJ－5	下層	40	3.8	1	〔45〕	〔4.5〕
6	SJ－5	下層	40	3.6	1.2	〔43〕	6.35
7	SJ－5	下層		〔3.9〕	〔0.8〕		〔5.5〕
8	SJ－12	下層	100	4.6	1.9	185	9.4
9	SJ　12	下層	100	3.7	0.8	105	6.7
10	SJ－12	下層	100	3.4	0.9	62.5	5.3
11	E4		90	3.7	1	85	6.7

土玉

No	遺構名	出土層位	残存率	径	穴の径	重さ
			(%)	(cm)		(g)
1	SJ－1	上層	100	2.3	0.4	10
2	SJ－2	床直	100	2.5	0.5	11
3	SJ　2		100	2.4	0.5	9
4	SJ－2	上層	40	2.15	0.55	〔4〕
5	SJ　3	上層	100	2.3	0.7	6
6	SJ－3	上層	70	2.3	0.5	6
7	SJ－4	上層	100	2.2	0.5	7.5
8	SJ－5	上層	100	2.0	0.5	7.5
9	SJ－5	上層	100	2.0	0.5	7.5
10	SJ－5		100	2.5	0.6	7
11	SJ－5	上層	100	2.15	0.6	7.5
12	SJ　10	下層	100	2.3	0.5	8
13	SJ－10	下層	100	2.5	0.5	11
14	SJ　10	上層	100	2.3	0.6	10
15	SJ－10	下層	100	2.4	0.6	7.5
16	SJ－10	下層	80	2.0	0.5	5
17	SJ－12	下層	100	2.4	0.5	10
18	SJ－12	床直	95	2.1	0.5	7.5
19	SJ－12	中層	100	2.1	0.4	7.5
20	SJ－12	下層	100	2.5	0.5	7.5
21	SJ　12	下層	100	2.3	0.6	9
22	SJ－12	Pit 2	100	2.5	0.5	11
23	SJ　12	中層	100	2.5	0.5	11
24	SJ－12	中層	100	2.5	0.5	7.5
25	SJ－12	中層	100	2.5	0.6	10
26	SJ－12	中層	100	2.4	0.6	9
27	SJ－12	中層	100	2.1	0.4	6
28	SJ－12	下層	100	1.9	0.5	5
29	SJ－12	下層	50	1.9	〔0.7〕	〔4〕
30	SJ－12	中層	100	2.4	0.7	8
31	SJ　12	中層	100	2.2	0.6	7.5
32	SJ－12	中層	100	2.2	0.5	9
33	SJ　12	中層	70	2.4	0.6	〔7.5〕
34	SJ－12	上層	40	2.1	〔0.55〕	〔2.5〕
35	SJ－13	最上層	100	2.0	0.55	5
36	SJ－14		100	2.55	0.45	8
37	SJ－14		60	2.55	0.55	7.5
38	SJ－14		100	2.25	0.55	7.5
39	SJ－14		100	2.1	0.6	7
40	SJ　15		100	2.3	0.55	10
41	SJ－15	下層	100	2.1	0.5	5
42	SJ　15	Pit 1	100	2.2	0.5	7
43	SJ－15	上層	100	2.25	0.6	9
44	SJ－15	上層	40	2.25	0.5	〔4〕
45	SJ－16		50	2.3	0.55	〔6〕
46	D4		100	2.2	0.6	8
47	E3		100	2.3	0.5	9
48	E6		100	2.45	0.6	11
49	F3		100	2.3	0.5	7.5
50	F3		40	2.75	0.4	〔7.5〕
51	G6		60	2.6	0.8	〔10〕
52			100	2.5	0.6	12.5
53	その他		100	2.3	0.6	10
54	遺構外		50	2.25	〔0.5〕	〔4〕
55			40	2.5	〔0.5〕	〔5〕

引用・参考文献

青木秀雄・河井伸一・福田聖・佐藤康二　2010年　『山崎遺跡・山崎山遺跡』宮代町文化財調査報告書第15集

青木美代子他　1984年　『赤羽・伊奈氏屋敷跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第31集

足立区伊興遺跡公園調査会・足立区教育委員会　1990年　『伊興遺跡　平成元年　－伊興遺跡公園予定地調査概報－』

今泉泰之　1979年　「古墳時代」『大山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集　埼玉県教育委員会

大野左千夫　1991年　「6. 漁撈」『古墳時代の研究　第４巻　生産と流通Ⅰ』　雄山閣出版

大谷徹　2007年　『夏目／夏目西／弥藤次』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第346集

小倉　均・柳山博之　1999年　『太田窟貝塚発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第255集　浦和市遺跡調査会

金子直行他　1987年　『北・八幡谷・相野谷　本文編』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第66集

栗岡　潤　2005年　『大山遺跡第10・11次』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第299集

酒井清治・大塚孝司・山下秀樹　1983年『久保山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第29集

笹森紀己子　1988年　『Ｂ－３号遺跡』　大宮市遺跡調査会第61集

社会教育課　市史編さん係　1999年　『巡田市史』　巡田市教育委員会

立石盛詞　1983年　「Ⅴ 結語　２ 土器について」『後張　本文編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集

谷口　榮　1996年　「東京低地・中川低地の土錘について」『下津弘・塚越哲也君追悼論文集　埼葛地域文化の研究』

谷口　榮　1999年　「コラム　東京低地の土錘とそのあいかた」『毛長川流域の考古学的調査－総括編－』

田部井功　1987年　「荒川流域の土錘・石錘」『荒川人文Ⅰ』　埼玉県

宮田和夫　2007年　『荒川財遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第338集

宮田和夫・山本靖　2010年　『銭塚Ⅱ／城敷Ⅰ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書369集

中村倉司　1999年　「埼玉県における5世紀代の土器―和泉式土器の行方―」『東国土器研究』５号　東国土器研究

永峯光一他　1997年　『伊興遺跡』　足立区伊興遺跡調査会

永峯光一他　1999年　『伊興遺跡Ⅱ』　足立区伊興遺跡調査会

西口正純編　1990年　『大針貝塚・沼谷貝塚』　埼玉県立博物館

福田　聖　1994年　「古墳時代の漁撈復元のための基礎作業－大宮台地とその周辺を中心として－」『研究紀要』第９号　戸田市立郷土博物館

細田　勝　2004年　『原／戸崎前／薬師堂根／相野谷／向原／北』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書295集

細田　勝　1980年　「伊奈町氷川神社採集の縄文土器資料」『金鈴』第22号

町田　信　1976年　「浦和市宮本遺跡の土錘について」『埼玉考古』第15号　埼玉考古学会

村田章人　1997年　『原／谷畑』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書179集

宮崎朝雄　1983年　「Ⅴ 結語　１集落について」『後張　本文編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集

矢口孝悦　2009年　『大道遺跡』羽生市発掘調査報告書第２集　羽生市教育委員会

山本禎・新屋雅明　2008年　『小林八束１／小林八束２』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書356集

渡辺　一　1990年　『鳩山窯跡群発掘調査報告書第２冊』　鳩山窯跡群遺跡調査会

写　真　図　版

1　全景写真（南東から）

2　全景写真（北西から）

図版 2

1　第 1 号住居跡　遺物出土状況

2　第 1 号住居跡　炉体土器

3　第 1 号住居跡　完掘状況

1　第 2 号住居跡　完掘状況

2　第 3 号住居跡　遺物出土状況

3　第 3 号住居跡　完掘状況

図版 4

1　第 4 号住居跡　遺物出土状況

2　第 4 号住居跡　完掘状況

3　第 5 号住居跡　完掘状況

1　第 6 号住居跡　遺物出土状況

2　第 6 号住居跡　完掘状況

3　第 7 号住居跡　完掘状況

図版 6

1　第 8 号住居跡　完掘状況

2　第 9 号住居跡　完掘状況

3　第10号住居跡　遺物出土状況

1　第10号住居跡　完掘状況

2　第11号住居跡　遺物出土状況

3　第11号住居跡　完掘状況

図版 8

1　第12号住居跡　遺物出土状況

2　第12号住居跡　完掘状況

3　第13号住居跡　遺物出土状況

1　第13号住居跡　完掘状況

2　第14号住居跡　遺物出土状況

3　第14号住居跡　完掘状況

図版 10

1　第15号住居跡　Pit1　遺物出土状況

2　第15号住居跡　完掘状況

3　第16号住居跡　遺物出土状況

1　第17号住居跡　完掘状況

2　第 1 号竪穴状遺構　完掘状況

3　第19号土壙　遺物出土状況

図版 12

1　第19号土壙　完掘状況

2　第27号土壙　完掘状況

3　G5グリッド　Pit1　遺物出土状況

1　第 1 号住居跡出土遺物①（第22図）

2　第 1 号住居跡出土遺物②（第22図）

3　第 1 号住居跡出土遺物③

4　第 1 号住居跡出土遺物④

5　第 1 号住居跡出土遺物⑤

6　第 1 号住居跡出土遺物⑥

1　第 2 号住居跡出土遺物①（第26図）

2　第 2 号住居跡出土遺物②（第26図）

3　第 2 号住居跡出土遺物③

4　第 3 号住居跡出土遺物①（第29図）

5　第 3 号住居跡出土遺物②（第29図）

6　第 3 号住居跡出土遺物③

1　第 3 号住居跡出土遺物④

2　第 3 号住居跡出土遺物⑤

3　第 3 号住居跡出土遺物⑥

4　第 3 号住居跡出土遺物⑦

5　第 3 号住居跡出土遺物⑧

6　第 4 号住居跡出土遺物①（第30図）

1　第 4 号住居跡出土遺物②（第30図）

2　第 4 号住居跡出土遺物③

3　第 4 号住居跡出土遺物④

4　第 4 号住居跡出土遺物⑤

5　第 4 号住居跡出土遺物⑥

6　第 4 号住居跡出土遺物⑦

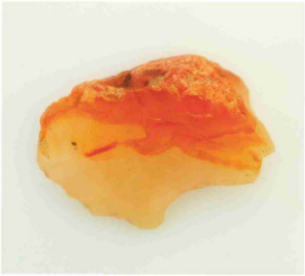
1　第 5 号住居跡出土遺物①

2　第 5 号住居跡出土遺物②

3　第 5 号住居跡出土遺物③

4　第 5 号住居跡出土遺物④

5　第 5 号住居跡出土遺物⑤



6　第 5 号住居跡出土遺物⑥

1　第 6 号住居跡出土遺物①（第56図）

2　第 6 号住居跡出土遺物①炭化物付着状況写真

3　第 6 号住居跡出土遺物②（第56図）

4　第 6 号住居跡出土遺物③（第56図）

5　第 6 号住居跡出土遺物④（第56図）

6　第 6 号住居跡出土遺物⑤

1　第 6 号住居跡出土遺物⑥

2　第 8 号住居跡出土遺物（第36図）

3　第 9 号住居跡出土遺物

4　第10号住居跡出土遺物①（第40図）

5　第10号住居跡出土遺物②

6　第10号住居跡出土遺物③

1　第11号住居跡出土遺物（第 7 図）

2　第12号住居跡出土遺物①（第41図）

3　第12号住居跡出土遺物②（第41図）

4　第12号住居跡出土遺物③

5　第12号住居跡出土遺物④

6　第12号住居跡出土遺物⑤

1　第12号住居跡出土遺物⑥

2　第12号住居跡出土遺物⑦

3　第12号住居跡出土遺物⑧

4　第12号住居跡出土遺物⑨

5　第12号住居跡出土遺物⑩

6　第13号住居跡出土遺物①（第45図）

1　第13号住居跡出土遺物②（第45図）

2　第13号住居跡出土遺物②孔写真

3　第13号住居跡出土遺物③

4　第13号住居跡出土遺物③孔写真

5　第13号住居跡出土遺物④

6　第13号住居跡出土遺物⑤

1　第14号住居跡出土遺物①（第46図）

2　第14号住居跡出土遺物②（第46図）

3　第14号住居跡出土遺物③（第46図）

4　第14号住居跡出土遺物④

5　第14号住居跡出土遺物⑤

6　第14号住居跡出土遺物⑥

1　第14号住居跡出土遺物⑦

2　第14号住居跡出土遺物⑦アップ写真

3　第15号住居跡出土遺物①（第49図）

4　第15号住居跡出土遺物②（第49図）

5　第15号住居跡出土遺物③

6　第15号住居跡出土遺物④

1　第15号住居跡出土遺物⑤

2　第15号住居跡出土遺物⑥

3　第16号住居跡出土遺物①

4　第16号住居跡出土遺物②

5　第17号住居跡出土遺物（第11図）

6　第19号土壙出土遺物①（第53図）

1　第19号土壙出土遺物②

2　第19号土壙出土遺物③

3　第19号土壙出土遺物④

4　第19号土壙出土遺物⑤

5　第28号土壙出土遺物

6　G5グリッド　Pit1　出土遺物

1　第11号住居跡出土　大型甕　口縁部のみ（第56図）

2　遺構外出土土器①（第20図）

3　遺構外出土土器②（第55図）

4　遺構外出土土器③（第57図）

5　石製模造品（表）（第41・55図）
（①第12号住居跡出土）
（②C4グリッド出土）

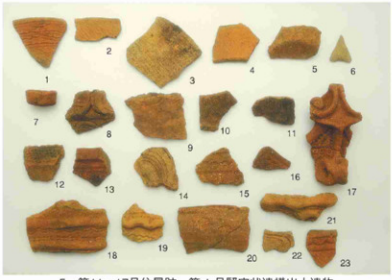
6　石製模造品（裏）

1　第12号住居跡出土　粘土塊

2　遺構外出土　土製品

3　遺構外出土　鉄滓①

4　遺構外出土　鉄滓②



5　第11・17号住居跡、第１号竪穴状遺構出土遺物

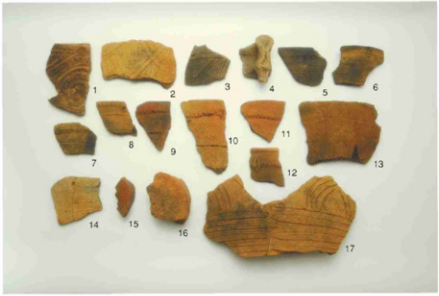
1～6　第７図　2～7
7～14・17　第11図　1～9
15・16・18～23　第13図　1～8

1・2　第15図　1・2
3～6　第17図　1～4
7～23　第13図　1～8

1　第4・46・53号土壙、
遺構外出土遺物①（早期、前期、中期）

1～12　第20図　19～30
13～18　第21図　1～4、6・7

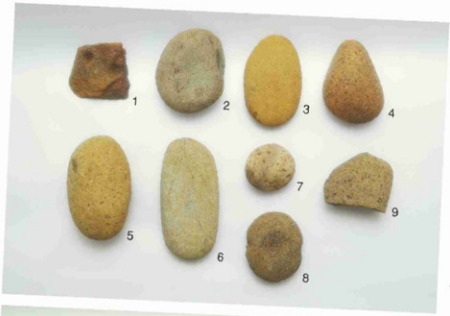
2　遺構外出土遺物②（後期①）



1～17　第21図　5・8～23

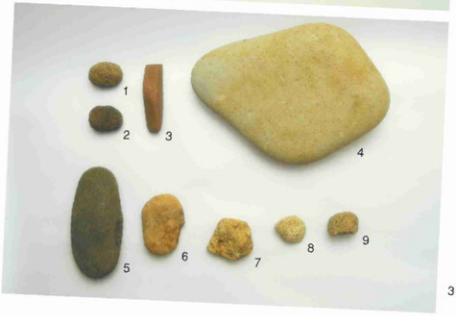
3　遺構外出土遺物③（後期②）

図版 30



1　遺構外出土石器（縄文時代）①
（第 2 表）

2　遺構外出土石器（縄文時代）②
（第 2 表）

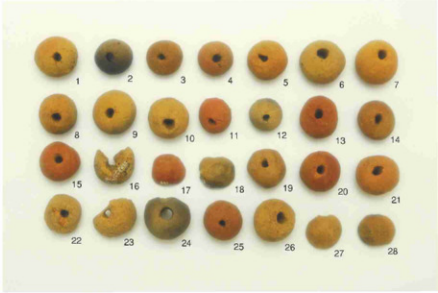


1　第 1 住居跡出土
2　第 2 住居跡出土
3　第 3 住居跡出土
4　第 5 住居跡出土
5　第10住居跡出土
6　第10住居跡出土
7　第14住居跡出土
8　第15住居跡出土
9　第15住居跡出土

3　第1・2・3・5・10・14・15号住居跡
出土石器（第 3 表）

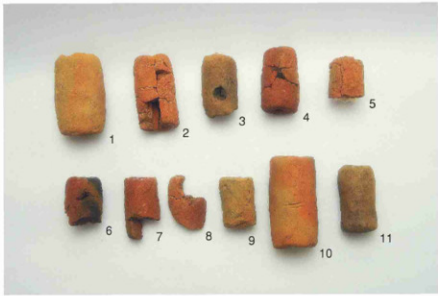
1　第１号住居跡出土
2～4　第２号住居跡出土
5・6　第３号住居跡出土
7　第４号住居跡出土
8～11　第５号住居跡出土
12～16　第10号住居跡出土
17～20　第14号住居跡出土
21　第13号住居跡出土
22～26　第15号住居跡出土
27　第16号住居跡出土

1　土玉①（第22・26・29・30・33・40・45・46・48・51図）



1～18　第12号住居跡出土
19～28　遺構外出土

2　土玉②（第41・55図）



1・2・4～8　第５号住居跡出土
3　E4グリッド出土
9～11　第12号住居跡出土

3　第５・12号住居跡、遺構外出土土錘（第33・41・55図）

1　現場説明会の様子

2　展示会の様子

報告書抄録

ふりがな	すわくぼいせき
書名	諏訪久保遺跡
シリーズ名	伊奈町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1集
著者氏名	高塚卓史・小杉秀幸
編集機関	伊奈町教育委員会
所在地	埼玉県北足立郡伊奈町大字小室9493
発行年月日	西暦2011（平成23）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
すわくぼいせき 諏訪久保遺跡	さいたまけんきたあだちぐんいなまち 埼玉県北足立郡伊奈町大字小室9493 ほか 番地他	11301	036	36°00'06"	139°37'31"	20100520 ～ 20100810	2,200	保育所及び特別養護老人ホームの建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
諏訪久保遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代	竪穴住居跡 2軒 竪穴状遺構 1基 土壙 11基 竪穴住居跡 14軒 土壙 22基 竪穴住居跡 1軒	縄文土器・石器・土師器・土製器・石製器・須恵器・鉄製品・鉄滓	台地縁辺部に展開する古墳時代中期の集落。

伊奈町埋蔵文化財調査報告書　第１集
諏訪久保遺跡
埋蔵文化財調査報告

平成23年３月30日　印刷
平成23年３月31日　刊行

発行／伊奈町教育委員会
〒362－8517　埼玉県北足立郡伊奈町大字小室9493
電話　048(721)2111

印刷／株式会社エコー宣伝印刷